ローズマリー・サトクリフ
『トリスタンとイズー』の研究

山本理奈・石川栄作

Untersuchung über „ Tristan and Iseult “ von Rosemary SUTCLIFF

Rina YAMAMOTO und Eisaku ISHIKAWA

Abstract

Rosemary SUTCLIFF, englische Schriftstellerin, verfasste 1971 ein Werk „Tristan and Iseult“, das auf den überlieferten Tristansagen beruht. Um die Charakteristik ihres Werks klar zu machen, brauchen wir zuerst den Stammbaum der Tristansagen zu verfolgen.

Die Stoffquelle der Tristansagen geht auf die altkeltischen Sagen in Irland zurück. Sie wurden in der zweiten Hälfte des 11. Jahrhunderts übers Meer nach Wales überliefert, wo das Urbild der Tristansagen entstand, unabhängig von den irländischen „Entlaufen“-sagen.

Das Urbild wurde danach von manchen Dichtern in ganzem Europa umgearbeitet. Der Stammbaum der Tristansagen wird gewöhnlich in 3 Gruppen geteilt: Berol-, Thoma- und Prosa-Tristan. Im Gegensatz zu der erzählenden Beschreibung des Berol-Tristans hat der Thoma-Tristan als Merkmal die vertiefte Innerlichkeit der Hauptpersonen. Und die Charakteristik des Prosa-Tristans besteht darin, dass er in die Arthus-Dichtungen eingeflochten ist.

Unter den 3 Gruppen benutzte Rosemary SUTCLIFF als Stoff hauptsächlich Berol-Tristan, aber er schuff selbstverständlich ein neues Tristanwerk, das von den traditionellen Tristansagen selbständig ist. In der letzten Hälfte der vorliegenden Arbeit vergleichen wir das Werk von Rosemary SUTCLIFF mit dem deutschen

Volksbuch „Tristrant und Isalde“ (als Berol-Tristan), und auch mit dem mittelalterlichen höfischen Epos „Tristan und Isolde“ Gottfrieds von Straßburg (als Thoma-Tristan), um das charakteristische Merkmal ihres Werks deutlich zu machen.

Das auffallendeste Merkmal zeugt vor allem, dass Rosemary SUTCLIFF den mystischen Liebestrank wegnahm, der traditionell nicht nur in Berol-, sondern auch in Thoma-Tristan eingeflochten war. Damit schildert die Schriftstellerin die Liebe zwischen Tristan und Iseult nicht als die künstliche, sondern als die natürliche Liebe, die ja wirklichkeitstreu und lebendig ist.

Nach diesem Konzept bearbeitete sie durch das ganze Werk den Tristanstoff. Also ist es auch ihr auffällig, dass sie überall die den Lesern leicht verständlichen Erklärungen gibt. Außerdem entwickelt sie ursprünglich zu komplizierte Liebesgeschichte zwischen Tristan und Iseult kurz und knapp, indem sie die unnötigen Elemente der bisherigen Überlieferungen beiseitelegte. Damit konnte sie die altkeltischen „ Entlaufen „-sagen und die mittelalterlichen Tristanüberlieferungen in ein modernes Werk umarbeiten.

はじめに

ローズマリー・サトクリフ(Rosemary SUTCLIFF)は、1920 年 12 月 24 日に海軍将校の娘としてイギリスのサリーに生まれた。彼女は幼少の頃から美術的才能を示していたため、十四歳になって美術学校に入り、二十代初めには軍隊に勤務する青年たちを描いたりする細密画家として出発したが、三十歳になった 1950 年代初頭からは、より大きく自由な世界での自己表現を求めて、子供のための歴史小説を書き始めた。その頃の作品としては『第九軍団のワシ』(1954 年) や『ケルトとローマの息子』(1955 年) などがあり、代表作『ともしびをかかげて』を書き上げた 1959 年には、優れた児童文学に与えられるカーネギー賞を受賞して、児童文学者としての地位を確立した。

このようにサトクリフは児童向けの歴史小説を多く書いたが、そのほかに大人向けの歴史小説をも書いている。その主な作品としては、『ベーオウルフ』(1961 年)、『トリスタンとイズー』(1971 年)、『アーサー王と聖杯の物語』(1979 年)、『アーサー王と円卓の騎士』(1981 年)、『アーサー王最後の戦い』(1981 年) 及び『剣の歌』(1997 年) など

のイギリス伝承のほかに、『トロイアの黒い船団』(1993年) 及び『オデュッセウスの冒険』(1995年) などのギリシア神話の再話もある。このような顕著な業績によって1975年には大英帝国勲章（ＯＢＥ）を授章し、さらに1992年に他界したあとには名誉大英勲章（ＣＢＥ）を授章している。これらの業績からサトクリフはまさに二十世紀イギリスを代表する歴史小説家であると評してもよいであろう。

本稿が取り扱うのは、サトクリフのこれら数多く残された作品の中でも、イギリスで生成発展していったトリスタン伝説を素材にして1971年に書き上げた作品『トリスタンとイズー』[1]である。この作品の前書きでサトクリフが述べているように、「たいていの人間にとって、トリスタンの物語は『アーサー王と円卓の騎士』の本の一章に過ぎない」（９頁）が、しかし、「そもそもの初め、『トリスタン』はケルトの伝説であって、竪琴弾きが、アイルランドやウェールズやコーンウォールの族長たちの丸太づくりの館で、暖炉を囲んで歌い聞かせたもの」(10頁) である。サトクリフはこのトリスタンとイズーの物語を再構成するにあたって、「できうるかぎりそのケルトの源泉にかえり、そうすることによって、この物語にひとつの大きな変化を持ち込んだ」(10頁) とも述べている。その大きな変化とは、従来のたいていのトリスタン伝説の作品の中に織り込まれている「愛の薬」のモチーフを削除したことである。一体、サトクリフはなぜこの「媚薬」のモチーフを削除したのであろうか。サトクリフの『トリスタンとイズー』の特質はどこにあるのであろうか。サトクリフの作品の特質を探り出すためには、まずはこのトリスタン伝説の生成と発展を考察しておく必要があろう。そこで本稿では、第一章で「トリスタン伝説の生成と展開」をまとめたあとで、第二章から第四章ではトリスタン伝説のあらすじを順に辿りながら、サトクリフの作品を常に他の作家の作品と比較考察し、その考察を踏まえて、最後の結びではサトクリフの特質を明らかに探り出すことにしたい。

第一章　トリスタン伝説の生成と展開

1. トリスタン伝説のケルト起源

サトクリフは自ら作品の前書きで、『トリスタンとイズー』の起源はケルトの伝説に

---

1)　テクストには Rosemary SUTCLIFF: Tristan & Isuelt. Farrar, Straus and Giroux 1991 を用い、本稿執筆にあたっては邦訳として井辻朱美訳『トリスタンとイズー』(沖積社 1989年)を大いに活用させていただく。以下、邦語引用文の頁数も本訳書に従う。

まで遡ると述べているが、一体、それはどのような根拠に基づくのであろうか。わが国におけるトリスタン伝説研究の草分けとも言うべき佐藤輝夫氏は、その研究書『トリスタン伝説—流布本系の研究』[2]の中でフランスの碩学（せきがく）ガストン・パリスによるケルト起源論を紹介しているが、ここでは主にそれを参照し、またときにはそのほかの研究をも参照しながらそのケルト起源の根拠をまとめることにしよう。

トリスタンとイズーの悲恋物語に関する伝説がもともとケルト起源であることは、まず第一には登場人物の名称から明らかに実証される。たとえば、主人公トリスタンの名称は八世紀にスコットランド北部を支配していたピクト人の王の息子ドゥルスト（「喧騒」、「嵐」の意味）に遡り、このドゥルストやそれから派生したドゥロスタンという名は、繰り返しピクト人の年代記の諸王の名前の中に現れている。[3]また女主人公イズーのもともとの名称イゾルデも、同じようにケルト・ピクト語のイシルトに遡り、一説によれば、この人物はアイルランドの妖精で、その名前は「神秘的な姿、熟視するもの」を意味しており、また別の説によれば、イシルトは「生命の水」の象徴であり、まさに水（海）によって蘇生をもたらす存在だとされている。[4]そしてマルケ王は「馬」の意味[5]で、コーンウォールの年代記にその名を留める人物であり、さらにモーロルトはケルト語で「海」を意味していると言われている。[6]そのほかにもブランジャンやリヴァラン、ゴーヴェルナルあるいはカエルダンといった登場人物の名前についても、いずれもが明らかにケルト的語源を持つ人物ばかりである。[7]

第二には、その悲恋物語がケルトの世界を舞台にして展開されていることからも容易に推測される。すなわち、マルク王の宮廷はコーンウォールにあり、物語はそこを拠点として展開するのであり、主人公トリスタンはそこからアイルランドへ出かけ、のちには大陸のブルターニュ半島にも出かけて、さらにはそこからコーンウォールへの旅を幾度となく繰り返すのである。ただトリスタンの故郷については、あとで述べるように、南ウェールズのイヨーノイスとする作品もあれば、大陸のブルターニュにあるとする作

---

2) 佐藤輝夫『トリスタン伝説—流布本系の研究』中央公論社 1981 年

3) ゴットフリート・フォン・シュトラースブルク(石川敬三訳)『トリスタンとイゾルデ』(郁文堂 1976 年)351 頁並びにミシェル・カズナーブ(中山真彦訳)『愛の原型—トリスタン伝説』28 頁及び 186 頁参照。

4) ミシェル・カズナーブ(中山真彦訳): 同上書 68-9 頁参照。

5) 同上書 97 頁参照。

6) 佐藤輝夫: 前掲書 59 頁参照。

7) 同上書 59 頁参照。

品もあり、作品によって異なる[8]が、しかし、いずれもケルトの世界に属することに変わりはない。物語舞台からケルト起源が明らかに窺えよう。

さらに第三には、作品の中で描かれた社会環境とその風習からもケルト起源が読み取られる。すなわち、トリスタン伝説に描かれた社会は、十二世紀ヨーロッパが見せたような騎士的キリスト教的文明の社会ではなく、それとはほど遠い未開の社会と風俗が至るところで見出される。[9]たとえば、この伝説では王たちの宮殿ですら原始生活を思わせる小屋に等しいと言わざるを得ない。また宮殿の中のイズーの部屋には泉の流れが貫いていて、その小川にトリスタンは木片を流して逢瀬の合図を送ることになっている。恋人たちが逃げ延びる森の中も、やっと太陽の光が洩れるような場所で、恋人たちはほとんど未開の生活を営んでいる。さらにトリスタンは十二世紀ヨーロッパの騎士たちのように名馬を持つのではなく、犬を飼い慣らしたり、槍の代わりに弓を持ち、鳥の声をまねたりするのである。

以上のほかに、第四の根拠として、たとえば、アイルランドの妃または娘イズーは医術に長（た）けていたり、愛の妙薬や悲しみを忘れさせる不思議な鈴が用いられていたり、マルク王は馬の耳を持つというエピソードもあれば、最後には切れども切れども新芽を出してくる葡萄の蔓のエピソードも出てくる。[10] これらの要素は、当時の騎士的社会においては考えられないものであり、この伝説がケルト起源であることをほのめかすものである。

2. 二つのケルト伝説

以上のことから、トリスタン伝説がケルト起源であることはほぼ間違いないと思われるが、それをよりいっそう裏付けるものとして二つのケルト伝説を挙げることができる。それはアイルランドで生まれた「駈落ち譚」と呼ばれるもので、『ディアミッドとグライーネの駈落ち』と『デアドラとウスナの子たちの死』がそれである。もちろんサトクリフも自分の作品の前書きでそれらを指摘している。この二つの「駈落ち譚」は、十二世紀半ばの写本『リーンスターの書』の中で十世紀にすでに存在していた物語として、その名が記されていることから、おそらく九世紀に生成していたものと推測される。確

---

8) たとえば、前者にはドイツ民衆本『トリストラントとイザルデ』、後者にはゴットフリート・フォン・シュトラースブルク『トリスタンとイゾルデ』が属する。これらの詳細については、以下で紹介するつもりである。

9) 佐藤輝夫: 前掲書 60 頁参照。以下の記述もそれに負うところが多い。

10) 同上書 61 頁参照。

かにその全容は今日知る由もないが、しかし、後世のいくつかの作品の中にこれらの作品への言及があって、その内容をある程度推定することができる。すでに上で引き合いに出した佐藤輝夫氏は、ヨーロッパの研究者たちの諸説を参考にして、それらの物語を再構成している。トリスタン伝説の生成を考えるうえで重要な伝説なので、以下ではまず最初の「駈落ち譚」に関して、ジャン・マルカールやガートルード・シェッパールの研究に基づいて再構成を試みている佐藤氏による内容紹介を、ここではさらに要約するかたちでごく簡単にまとめておくことにしよう。[11)]

1)『ディアミッドとグライーネの駈落ち』

フィアナ族の老王フィンはアイルランド王の娘グライーネを正妻に迎えたいと申し入れたが、娘グライーネはそれを断るつもりでむずかしい条件を出した。その条件とは、アイルランドのすべての種類の野獣をひと番（つがい）ずつ結納として献上せよというものであった。しかし、この難題もフィン王の甥クウィールテの努力によって克服されて、グライーネは老王フィンに嫁いだ。グライーネは老王と一日たりと安らかに暮らすことはなかった。若い彼女の心にはディアミッドという「見つめても見飽きない」魅力の若者が介在していたのである。

ある日のこと、アイルランド王は老王フィンと娘グライーネをはじめ、フィアナ一族の重臣たちを招いて宴を催した。その夜、グライーネは侍女に魔法の飲料を持参させて、それを夫フィンや重臣たちに飲ませると、フィンの息子オイシンと甥ディアミッド以外は、全員が眠りに落ちた。そこでグライーネはまずオイシンに駈落ちの話を持ちかけるが、父親の妻と結ばれるのは法度（はっと）であると断ったので、次にはディアミッドに同じ話を持ちかけた。ディアミッドも即座にそれを断ると、グライーネは彼に向かって、「皆が目覚めぬうちに、私を連れて逃げてくれなければ、身の危険と破滅に陥る呪い（ゲイス）をあなたにかけてやる」と脅した。そこでディアミッドはグライーネとともに逃げた。フィン王は目覚めてからその跡を追ったが、駈落ちの二人はある丘の洞窟に身を潜めた。

その後、駈落ちの二人は連れてきた老婆の裏切りからフィン王に発見されて、そこか

---

11) 同上書 64-93 頁参照。佐藤氏はジャン・マルカール著『アイルランド・ケルト叙事詩』(Jean Markle: L'Epopee celtique d'Irlande. Paris, Payot 1971)とガートルード・シェッパールの学位論文『トリスタンとイゾルデ—物語の起源に関する研究』（Gertrude Schoepperle: Tristan and Isolde, a Study of the Sources of the Romance. Frankfurt and London 1913)に基づいて再構成している。

らさらに逃亡を企てた。それから二人がどのような生活をしたのかは、明らかではないが、十六世紀の『リズモア司祭の書』の中にディアミッドの悔恨を歌ったバラードが掲載されているところからすると、ディアミッドの心の中には呪いをかけられて逃亡したという悔恨とともに、不自由な生活に耐えられないものがあったに違いない。また十八世紀の写本によれば、二人は逃亡の間、寝るときには二人の間に石を置いていたといい、さらにその寝床を去るときには生肉を置いていたという。それはディアミッドがグライーネの身体には触れていないことを暗示するためであった。そのようなディアミッドの潔白さにグライーネは満足せず、ある日、水飛沫（みずしぶき）が彼女の太腿（ふともも）に当たったとき、彼女は彼に向かって、「あなたよりもこの水飛沫の方が大胆だわ」と口にしたことから、彼は彼女を初めて妻として扱い、そのときから二人の間に蜜月の生活が続いたのであろう。

そのあとの展開について、十六世紀の『リズモア司祭の書』と、それを粉本（ふんぽん）にして拡大した十八世紀のケネディ・コレクションとを相補って再構成すると、その後、ディアミッドとグライーネの二人は川岸に沿って移動し、そこにねぐらを構えて食事の準備をしたところ、串の削りくずが小川に流れて、フィン王らが狩りをしているあたりの岸辺に流れ着いた。フィン王はその木屑に目をとめて、ディアミッドが削ったものだと確信して、鬨（とき）の声を挙げさせた。それを聞くと、ディアミッドがかつての誓いによって狩りに参加することを知っていたからである。予期したとおり、ディアミッドはグライーネが引き止めたにもかかわらず、狩り場にやって来た。彼にとって誓いを破って狩りに出かけないままでいることは、一種のタブーであり、「身の破滅」だったのである。こうして狩り場に出たディアミッドは、野豚を倒すものの、フィン王に命じられて豚の身の丈を裸足で計っているうちに、その猛毒の逆毛に足を刺されて死んでしまった。グライーネはそこへ駆けつけて、死んで横たわるディアミッドを目にすると、意識を失い、地面に倒れてしまった。

この最終場面に関しては、十八世紀のケネディ・コレクションでは別の記述が見られ、それによると、フィン王には自分で流れの水を汲んできて飲ませるならば、手負いの傷を癒す能力があったという。そこでディアミッドはフィン王に向かって、流れの水を飲ませてくれるように願うが、フィン王はそれを拒む。フィン王の息子オイシンの子オスカーがそれを見て憤り、祖父に水を汲みに行くよう頼むと、フィン王は両手で水をすくったものの、ディアミッドに向かって半分も歩かぬうちに、指の間から水をもらしてしまう。二度目も同様で、三度目にフィン王が水をディアミッドのところに持ってきた瞬間、ディアミッドの生命はその肉体を離れていた。哀れなグライーネは彼の横たわるの

を見て、意識を失い、地面の上に崩折れてしまう。フィン王はこうして残酷な復讐を遂げたことに満足すると、その場を立ち去って行った。

以上がケルト伝説の『ディアミッドとグライーネの駈落ち』の大筋であるが、十六世紀の『リズモア司祭の書』と十八世紀のケネディ・コレクションとを相補いながら再構成したものであるから、あとから敷衍（ふえん）された部分も当然あるはずであり、従って、厳密に言えば、九世紀の原型そのものであると言うわけにはいかない。しかし、上述のあらすじの骨格はほぼ原型に近いものであったと推定してよいであろう。このような内容の伝説が九世紀のアイルランドにおいて生まれ、それが海を渡ってウェールズに伝えられて、そこからトリスタン伝説が新たに派生していったと推定されるのである。やがて成立するトリスタン伝説と比べてみると、上記のケルト伝説の原型は似ている部分も多いが、異なった部分ももちろん多い。最も大きな相違点は、ケルト伝説では女性の方が「呪い」をかけて、駈落ちのイニシアティブをとっている点である。そのほかに二人の恋人たちの結末に関しても、二通りの伝承に分かれているうえに、そのいずれの内容もトリスタン伝説とは著しく異なっている。この恋人たちの最期に関しては、もう一つのケルト伝説『デアドラとウスナの子たちの死』がのちのトリスタン伝説の生成に少なからず影響を及ぼしたものと推定される。その伝説に関しても、H. ストークス／E. ウィンディッシュ共編テクストに添えられた英訳に基づく佐藤輝夫氏の内容紹介を、ここでもさらに要約するかたちでごく簡単にあらすじをまとめることにしよう。[12)]

2)『デアドラとウスナの子たちの死』

アルスター族のコノハー王が歌人フェリムの館で饗宴を催したとき、その席に歌人フェリムの妻が一人の小娘を伴って出た。そのとき魔法使いのキャスバットが、この小娘のせいで一大惨事が降りかかるであろうと予言した。これを聞いた国王護衛の戦士たちはその小娘を殺そうとしたが、国王はそれを拒んで、小娘を引き取って里子とし、成長した暁には自分の妻にしたいと言った。魔法使いキャスバットからデアドラと名付けられたその小娘は、城内に匿われ、里親とその妻、侍女リーバハムそしてコノハー王以外は出入りを禁じられた。こうして彼女は成長して天下随一の美女となった。

---

12) 同上書 93-9 頁参照。佐藤氏は H..ストークス/ E.ウィンディッシュ共編テキスト(Hrsg. von W.H.Stokes / E.Vindisch: Irische Texte mit Übersetzungen und Wörterbuch. Leipzig 1880-1909)の英訳に基づいて再構成している。

ある雪の降る日、里親は子牛を屠（ほふ）って、その血を雪の上に流した。そこへ大鴉が飛んで来て、その血を飲んだ。それを見ていた娘デアドラは侍女リーバハムに向かって、「自分は頭髪が大鴉の色で、頬には子牛の血の色がさしていて、皮膚は雪のように白い男を夫にしたい」と言った。すると侍女はそのような男がコノハー王の家臣の中にいると言って、ウスナの子ニーシャの存在を教えた。ニーシャがデアドラの部屋に連れて来られると、彼女は彼に恋を打ち明けて、一緒に逃げることを申し出た。ニーシャは国王を恐れてためらったが、二人の弟とともに百五十人の兵を連れてスコットランドに逃避した。しかし、そこでもスコットランド王がデアドラの美しさに心奪われて求愛してきたので、一行は死闘ののち、ある島に逃げ延びた。

コノハー王はデアドラとウスナの子らの逃亡に怒りを示して、策を弄して彼らを連れ戻そうとする。彼は最初二人の使者に断られたものの、最後にはファーガスという使者を逃亡者たちのいる島に送った。デアドラは前夜見た夢の占いを引き合いに出して、その使者の誘いに応じないよう、ニーシャに警告するが、ニーシャはその反対を押し切ってアイルランドへの帰国に踏み切った。

ニーシャらはやがてボーラアという人物の砦に辿り着くが、この男はニーシャへの反逆を国王に約束していたので、一行は困苦を極めた逃避行を続けて、最終的にはエーメンの赤枝の館に逃げ込んだ。コノハー王はトレン＝ドーン・ドランという男に逃亡者たちの様子を探らせるが、その男は館の窓から中の様子を窺っているとき、デアドラの合図でそれに気づいたニーシャによってチェッカー（将棋の一種）の駒を投げつけられて、眼を傷つけられてしまった。味方に勝ち目のないことを悟ったコノハー王は、次には魔法使いのキャスバットを呼び寄せて、妖術をウスナの子たちにかけるよう命じた。彼女が魔力で彼らの周辺に大波を立てると、彼らは波間に漂い、苦戦を強いられ、ついに三人とも殺されてしまった。その間、デアドラはエーメンの牧へ出かけていたが、その出来事を聞き知ると、ニーシャらの横たわる場所に戻った。彼女は髪を切り、ニーシャの血を飲むと、彼の蒼白な頬には血の色が差してきた。彼女はニーシャに口づけ、その血をすすりながら、哀悼の短詩を歌ってから、墓の中にすわり、三度夫の口にくちづけて、墓穴の中に降りて行った。

そのあとのデアドラに関しては、二つの伝承が書き継がれている。その一つによると、彼女は丸一年コノハー王の側で過ごしたが、笑みを浮かべることもなく、どのようなものにも慰められることはなかった。そこでコノハー王はフェルマーの公子イオガーンに、デアドラを戦車に乗せてからどこかに棄て去るようにと指図した。こうして戦車が走っているとき、デアドラはコノハー王とイオガーンに憎しみを込めて鋭い一瞥を与えてい

たが、コノハー王から「わしらに投げつけるそなたの視線は、二匹の牡羊の間に置かれた牝羊の投げる視線じゃ」と言われるや否や、立ち上がり、戦車から飛び下りて、岩角に頭をぶつけて果ててしまった。

もう一つの伝承によると、デアドラはニーシャの墓の中に降りて行って、すぐに死んでしまったが、コノハー王はニーシャとデアドラが死んでも一緒にいることに怒りを示して、墓の中で二人を引き離すように命じた。しかし、朝になると、二つの墓は口を開いて、二人は一緒になっていた。そこでコノハー王は永遠に引き離すために、二人の間に二本のいちいの木の棒杭を立てさせたが、その二本の棒杭からは二本のいちいの木が芽生えてきて、ぐんぐん成長し、大聖堂の上で互いに絡み合った。

以上が二つ目のケルト伝説『デアドラとウスナの子たちの死』の大筋であり、1887年刊行の H. ストークス／E. ウィンディッシュ共編テクスト中の英訳に基づいて再構成されたものであるが、先に紹介したディアミッド伝説と同様、その原型の骨格はほぼこれに近い内容であったと推測してもよいであろう。ここでも女性の方がイニシアティブをとって駈落ちをしていることが理解できよう。のちのトリスタン伝説とまったく関係のないエピソードも織り込まれているが、特にデアドラの最期に関しては、二つの異なる伝承が古くからあったものと推測され、その一つがのちのトリスタン伝説に少なからず影響を与えることになったことは確かであろう。いずれにしても、上で紹介してきたアイルランドの二つの伝説が、やがて海を越えてウェールズの地に伝えられて、そこから新たにトリスタン伝説が生まれたと推定されるのである。

3. トリスタン伝説の生成と発展

では、アイルランドで九世紀に生まれたそれら二つのケルト伝説は、いつ頃ウェールズの地に伝えられ、それらの「駈落ち譚」がどのようにしてトリスタン伝説へ移行して、どのような内容へと発展していったのであろうか。

1) アイルランドからウェールズへの伝承

まずそれら二つの伝説がアイルランドから海を渡ってウェールズの地へ伝承された時代としては、十一世紀後半以降が考えられる。[13] その頃、ウェールズを治めていたのは、グゥイネドの王グリュフィド（1075−1137）で、彼はアイルランド人を母に持ち、

---

13) 以下の記述は同上書 104-5 頁に負っている。

幼少時代をアイルランドで過ごした人物で、彼が王位に就くことができたのもアイルランドの軍勢の援助を得てのことであったと言われている。その後継者オーウェン・グゥイネド（1137−69）はプランタジュネ家のアンリ二世の妹を妃に迎えている。この二人の王の時代にアイルランドとウェールズの間で親密な交流があったと思われる。しかもその頃には、『マビノギオン』の最初のマビノギ（物語）が作り出されて、ウェールズ中世文学の黄金時代が訪れるのである。さらにジェフリ・オブ・モンマスは 1137 年前後に『イギリス王列伝』を著して、やがてヨーロッパ世界を風靡（ふうび）するアーサー王物語の礎を築くのである。そのような文学的にも豊かな時代にアイルランドの詩人がウェールズの宮廷を訪れて、アイルランド特有の「駈落ち譚」を伝え、それに興味を覚えたウェールズの詩人が、それらからヒントを得て、トリスタンに関する物語を作り出したと推定されるのである。

そのトリスタン伝説の原型はもちろん現在遺されていない。しかし、上述の『マビノギオン』には「タルウイク(Tallwch)の伜ドリスタン(Drystan)」の名前が見出されるだけではなく、ドリスタンがマルクの妻エシルト(Essyllt)、つまりイズーの恋人であったことが明示されている[14]ことからすると、十二世紀半ばにはすでにトリスタン伝説が出来上がっていたことが確証される。以上のことから、トリスタン伝説の原型は十一世紀後半から十二世紀初めには生成していたものと考えてよいであろう。

では次に、そのトリスタン伝説の原型が生成する際、もともとのアイルランドの「駈落ち譚」はどのように改作されたのであろうか。最も際立った改作は、アイルランドの「駈落ち譚」における「呪い」（ゲイス）が削除され、それに代わってトリスタン伝説に特有なものとして「フィルトル」（愛の飲料）が物語の中に取り入れられたことであろう。この「愛の媚薬」の導入によって、単なる「駈落ち譚」でしかなかった物語が、ウェールズの恋物語に書き改められたと推定されるのである。そのトリスタン伝説の原型は、物語内容から見て、大きく分けて次の四つのブロックから成り立っていたものと推定される。

まず第一のブロックが、トリスタンの出生とその後の修業の旅の物語で、この部分には当然のことながらトリスタンの両親の物語も含まれる。

第二のブロックは、マルク王が求婚をすることによって、のちにアイルランド王女イゾルデとトリスタンとが運命的に愛で結び付くことを取り扱った物語で、「愛の媚薬」の導入によって新しく創作されたトリスタン伝説の中心部分である。

---

14) 同上書 100-2 頁及び 105 頁参照。

第三のブロックは、マルク王の妃イゾルデとトリスタンの逢瀬を語った物語で、そののちに展開される森への逃亡生活などもこれに含まれる。

第四のブロックは、トリスタンが王妃イゾルデと決定的に別れてから、放浪の旅の末、白い手のイゾルデと結婚し、やがては「黒い帆」のエピソードののちトリスタンも王妃イゾルデも死んでしまうが、墓の中で二人は永遠に結び付くという物語の締め括りの部分である。

こうして四つのブロックから成る大きな物語として成立したウェールズのトリスタン伝説が、その後各国の物語詩人たちの興味の的となり、詩人たちはそれを自らの物語へと再構成していくのである。

2) ベルール系のトリスタン伝説

それらの詩人の中でもまず最初に注目すべきは、十二世紀後半に活躍したフランスの詩人ベルールであろう。当時、イギリスは政治的にも文化的にもフランスと強く結び付いており、ベルールはその頃にはイギリスに滞在していたと推定される。彼はそこで原型から派生したと考えられるトリスタン伝説を伝え聞いて、自らの作品『トリスタン物語』[15] を書き上げた。それが具体的にいつ頃のことであったのか、その執筆年代については 1165～1170 年だとする説と、1190 年頃とする説があって、はっきりしない。しかもそのベルールの作品は、現在ではわずかにパリ国立図書館所蔵の一写本に、それも不完全な形で残されているに過ぎない。その写本が伝えているのは、上で四つに分けた物語ブロックのうち、第三のブロックの一部であり、王宮の出入りを禁止されたトリスタンが、イズーを呼び出した場面に始まり、モロアの森での生活を経たのち、イズーがマルク王のもとに戻り、宮廷の三人の密告者のうち二人目がトリスタンに倒されたところで、物語は中断している。

このベルールの作品で特徴的なのは、物語が淡々と叙事的に語られながら展開していることであり、トリスタンとイゾルデはコーンウォールに向かう船の中で飲んだ秘薬によって結び付けられた（ただし、この部分は残念ながら残されていない）と推定される。しかもその秘薬の効力は三年間と限定されていて、その三年間の期限がモロアの森で切れるのであり、その場面がドラマチックに生き生きと描写されているところに特徴がある。

---

15) ベルール（新倉俊一訳）『トリスタン物語』（「フランス中世文学集 1 信仰と愛と」所収）白水社 1990 年

ベルールの作品が完全に遺されていないのは、まことに残念なことであるが、しかし、幸いにも、この不完全な物語部分を補ってくれるものが現在の我々に伝えられている。ベルールとほぼ同じ時期に活躍したドイツの詩人アイルハイルト・フォン・オーベルクの作品『トリストラント』[16] がそれである。アイルハルトが自らの作品をいつ頃書き上げたのか、その制作年代に関しても、1170年頃とする説と、1185年ないし1190年頃とする説があって、正確な年代は確証されないが、これまでの研究によってアイルハルトはベルールと同じ素材を用いたことが明らかにされている。しかもアイルハルトの手による物語は完全に伝えられており、その点においても貴重な作品である。この作品によってベルールで欠落しているトリスタンとイゾルデの船の上での秘薬による運命的な結び付きが、どのようなものであったかが窺い知れる。ただアイルハルトの作品ではその秘薬の効力は三年間ではなく、四年間とされている。アイルハルトの特徴は特にあらすじを韻文で淡々と展開させているところにあると言ってもよいであろう。このアイルハルトの作品は、ベルールと同じように、十二世紀のトリスタン伝説の原型から派生した作品を素材としたものなので、特にベルール系のトリスタン伝説に属するものと考えられている。

このアイルハルトの作品は十五世紀後半になって、その頃すでに発明されていた印刷術の発達も手伝って、民衆本のかたちで散文にも書き換えられた。その民衆本『トリストラントとイザルデ』[17] の作者の結びの言葉によると、「この昔語りを初めて文字に記したのは、ブリタニアの匠、アイルハルト・フォン・オーベルクであったが、韻文であったために世の人々にはまったく理解されずに、賞賛を得ずして終わった。今、自分の名前を秘めたまま、この昔語りを散文の形に改めて、世に贈る」(328 頁)とあり、1484年にアウグスブルクのアントニウス・ゾルク印刷であることもはっきりと最後に記載されている。アイルハルトの時代に隆盛を極めた韻文作品は、時代の経過とともに散文へと変わっていって、貴族の読者から次第に民衆の読者へ普及していったさまが如実に表されている。この民衆本の物語自体は大筋において素材のアイルハルトの作品とほぼ同じであるが、当然のことながら当時の風潮に合わせているところもあって、貴重な作品である。アイルハルトを素材にしていて、大筋においてほぼ同じ展開でもあるので、このドイツの民衆本もベルール系のトリスタン伝説に属する作品と考えるべきであろう。

---

16) Franz LICHTENSTEIN (Hrsg.): Eilhart von Oberge. Georg Olms Verlag Hildesheim・New York 1973.　なお、アイルハルト・フォン・オーベルクの作品の邦訳は、まだ出版されていないが、佐藤輝夫氏の前掲書においてかなり言及されている。

17) 小竹澄栄訳　民衆本『トリストラントとイザルデ』国書刊行会 1988年

3) トマ系のトリスタン伝説

このベルール系のトリスタン伝説に対して、それとは対照的な特徴を示すもう一つ別の系統の作品群がある。その系統の最初の作品を書き上げたフランスのトマを代表して、トマ系と呼んでいるものがそれである。作者トマについては詳しいことは分からないが、上述のベルールと同じように、トマもまた十二世紀後半にイギリスに住み、おそらくロンドンのプランタジュネット王家の宮廷に仕えていたものと推測される。彼がトリスタン伝説[18]を書き上げた時期についても、1150年代とする説があれば、1170－75年とする説もあって、はっきりとは断言できない。いずれにしてもトマは十二世紀に生成したトリスタン伝説の原型を直接素材に用いて自らのトリスタン物語を展開していったと考えられる。ただ残念ながら彼の作品も五つの写本に、不完全な八つの断片の形で残されているに過ぎない。その残された物語部分は、上で分類した四つの物語ブロックのうち、第三と第四のブロックの一部分に相当するが、特に第四のブロックにおける恋人たちの最後を語る部分が残されている点で貴重である。トマの作品の特徴は、叙事的なベルールの叙述に対して、内面的な叙述が多くて、同じ表現が繰り返されることによって登場人物の内面がより深く掘り下げられているところにある。トリスタンとイズーが運命的な媚薬を飲む場面は、残念ながら欠落しているが、のちの叙述からして、二人の主人公の愛は秘薬を飲む以前からほのかに芽生えていて、コーンウォールへ向かう船の上で飲んだ愛の媚薬によって完全なものになったと考えられる。すなわち、トマの作品においては、秘薬の効力に期限は付けられておらず、二人の愛は自発的行為に基づくものと推測され、そのためその作品では嫉妬の感情が恋愛感情とあざなうようにして混在しており、嫉妬の感情が強力なものであればあるほど、のちに忍び寄る魂の合一もより強力なものとなっているところにその特徴がある。

このフランスのトマの作品を素材として中高ドイツ語による叙事詩『トリスタンとイゾルデ』[19]を書き上げたのが、ゴットフリート・フォン・シュトラースブルクである。この作品が書かれた時期は、1210年頃と推測されるが、残念ながら、恋人たちの最後の場面は未完に終わっている。その代わりにトリスタンの両親の物語や二人の主人公の「媚薬」による結び付きなどをはじめ、それぞれのエピソードが詳しく展開されている。ただあらすじの展開という点では素材としたトマの作品にほぼ従っていると言ってよ

---

18) トマ(新倉俊一訳)『トリスタン物語』(「フランス中世文学集1　信仰と愛と」所収)白水社 1990年

19) ゴットアリート・フォン・シュトラースブルク(石川敬三訳): 前掲書

いであろう。ゴットフリートの文学的意図は、新しいものを創造することではなく、与えられた素材を入念に自らの芸術作品に作り直すことにあったのである。従って、ゴットフリートの作品の特徴は、十三世紀初期のドイツ中世騎士社会の要素が至るところに織り込まれているところにあると言ってよいであろう。その意味ではトマのトリスタン世界とは別の世界が見事に描き出されていて、貴重な作品である。

フランスのトマの作品は、十三世紀初期のドイツのゴットフリートに引き継がれただけではなく、さらに1300年頃になると、イギリスにも受け入れられて、中世英語詩『サア・トリストレム』[20] が書き上げられた。これは韻文によるものであるが、あらすじの展開は大幅に短縮され、外面的なおおまかな出来事の骨組みが残っているだけである。

4)散文トリスタン

1300年頃にイギリスで『サア・トリストレム』が韻文で書かれたのに対して、当時フランスにおいては散文で書かれたトリスタン伝説もある。散文トリスタンと呼ばれているものがそれである。散文はそれまで科学物や聖書、その他の翻訳や史書にのみ用いられていたが、十三世紀初めからは次第に物語にも用いられるようになったもので、同時にこの散文物語という新しい形は、変化した生活感情の現れでもあった。[21] フランス最初の散文によるトリスタン物語は、およそ1225年から1235年の間に出来上がったが、そののち1250年以後には改作されて、膨大な量に膨れ上がったものが数多くの写本や初期の印刷本となって残されている。[22]このフランス語の散文物語では従来からの主要人物たちのことだけではなく、これまで取り扱われてこなかった騎士の冒険のことも新たに導入されており、ここでトリスタン伝説は決定的にアーサー王物語圏に結び付けられたのである。[23] 1300年頃にイタリアで生み出された作品『ラ・タヴォラ・リトンダ』（『円卓物語』とも呼ばれる）におけるトリスタン物語の主な素材となったのも、このフランス語の散文物語のイタリア語訳であったと言われている。[24] やがて1500年代に入ると、トマス・マロリーによって『アーサー王物語』[25] がまとめられて、トリスタン

---

20) 古賀允洋訳　中英語『サア・トリストレム』ガーデン会「飛行」第33～40号2000～2007年

21) ゴットフリート・フォン・シュトラースブルク(石川敬三訳): 前掲書370頁参照。

22) 同上書370-1頁参照。

23) 同上書371頁参照。

24) 同上書371頁参照。

25) サー・トマス・マロリー(中島邦男・小川睦子・遠藤幸子訳)『完訳アーサー王物語』（上）(下) 青山社1995年及びトマス・マロリー(井村君江訳)『アーサー王物語』(I～V))筑摩書房2004～07年

伝説はそのアーサー王物語の中に織り込まれることになるのである。

5)近代および現代におけるトリスタン伝説

以上は中世までのトリスタン物語の生成と発展であるが、近代になって十八世紀の終り近くにトリスタン素材が再び世に知られるようになり、やがて十九世紀になると、ゴットフリートの中世叙事詩を現代語訳で読んで深く感興をそそられたリヒャルト・ワーグナーが楽劇『トリスタンとイゾルデ』(初演 1865 年) [26] を作り上げ、トリスタンとイゾルデの愛、特に「愛の死」に新しい解釈を与えたことは有名である。トリスタン伝説はこのワーグナーの作品によって現代にまで知られることになったと言ってもよいであろう。

このように再び人々の注目の的となったトリスタン伝説の研究を行いながら、現代においてその物語を再構成したのがフランスの文学研究者ベディエ編集の『トリスタン・イズー物語』[27] である。ベディエは中世以降のすべてのトリスタン伝説を用いながら、トリスタン伝説のすべてのエピソードを盛り込んでいるところにその特徴がある。

また二十世紀に入って映画が普及すると、トリスタン伝説はその映画の題材にも取り入れられる。フランスの作家ジャン・コクトーの小説を映像化した映画『永遠回帰』(1943 年) [28] のほかに、最近ではアメリカ映画『トリスタンとイゾルデ』(2006 年) [29] があり、現在ＤＶＤで入手可能である。

トリスタン伝説は以上のような生成と発展の歴史を辿ってきたのであるが、現代イギリスのローズマリー・サトクリフは一体、どういう素材を用いて自らの作品を作り上げていったのであろうか。「はじめに」でも述べたように、サトクリフは過去におけるたいていのトリスタン伝説の中に取り入れられていた「愛の薬」のモチーフを削除したところに、その独自性が認められる。その伝統的なモチーフを削除することによってどのような作品が出来上がったのであろうか。サトクリフの文学的意図はどこにあるのか。サトクリフのトリスタン物語の特質はどこにあるのであろうか。以下においてはトリスタン物語をおおまかに上記の四つの物語ブロックに分けて、常に他の作家の作品と比較

---

26) リヒャルト・ワーグナー(高辻知義訳)『トリスタンとイゾルデ』音楽之友社 2000 年

27) ベディエ編(佐藤輝夫訳)『トリスタン・イズー物語』(岩波文庫) 岩波書店 1953 年

28) ジャン・コクトーの盟友ジャン・ドラノワ監督によるフランス映画(1943 年)。わが国では『悲恋』の日本語タイトルが付けられている。

29) ケビン・レイノルズ監督のアメリカ映画(2006 年)

しながらあらすじを順に辿ることによって、サトクリフのこの作品の特質を探り出すことにしたい。

なお、その際、ベルール系のトリスタン伝説としてはドイツ民衆本『トリストラントとイザルデ』を用い、トマ系のトリスタン伝説としてはゴットフリート・フォン・シュトラースブルクのドイツ中世叙事詩『トリスタンとイゾルデ』を用いることにしたい。

第二章 トリスタンの出生とその後の修業の旅

1. トリスタンの出生

主人公トリスタンの出生に先立って、トリスタン伝説ではたいてい最初に両親のエピソードが展開されるのであるが、この両親の物語についてはベルール系とトマ系では著しい相違が見られる。

まずベルール系の民衆本では、主人公の父はイヨーノイス（スコットランド南東部あるいは南ウェールズ）[30] のリバリン王として登場し、ショッテン（スコットランド）王と戦っていたクルネヴァル（コンウォール）のマルク王を援護するために出かけて、その国で王の妹ブラシュフルールに出会い、彼女に恋をする。彼女の方も同じく彼に恋心を抱いていたので、マルク王は誠心誠意尽くしてくれたリバリンに妹ブランシュフルールを妻に与えた。やがて彼女は身ごもり、それを機会にリバリンは奥方を伴って故郷イヨーノイスに帰ることとなった。ところが、その帰国の船旅は悪天候に見舞われて長引き、奥方は船の上で産み月を迎えた。奥方は産みの苦しみに耐えきれず、弱り果てて、ついに息を引き取るが、赤子は母の腹を切り裂いて取り出されて、生命をとりとめた。この幼児がトリストラントである。ただこの民衆本ではその名前の由来に関しては触れられていない。リバリン王は奥方を亡くしたことで悲しみの奈落の底に突き落とされるが、生まれた幼子を故国へ連れ帰ると、乳人（めのと）の手に委ねて、その後も生き延びることになっている。

これに対してトマ系のゴットフリートでは、主人公の父リヴァリーンは、パルメニーエ（フランスのブルターニュにある、あるいはそれに隣接する領国で、居城はカノエール）[31] の領主として登場するが、主人公が出生する前に戦死することになっている。しかもリヴァリーンがマルケ王の妹ブランシェフルールと結婚する経緯（いきさつ）に関

---

30) 小竹澄栄訳: 前掲書 330 頁参照。

31) ゴットフリート・フォン・シュトラースブルク(石川敬三訳): 前掲書 9 頁参照。

しても、秘めた恋愛として展開されている。それによると、パルメニーエの領主リヴァリーンは、自らの敵ブルターニュの大公モルガーンと戦い、和平を結んだのち、当時名望が高まりつつあったコーンウォールのマルケ王の噂を聞いて、その国に出かけた。彼はそこのティンタヨーエルの城で催された騎士の試合で抜きんでた腕を見せ、マルケ王の妹ブランシェフルールの心をとらえたが、その二人の恋愛は秘められたものとして展開されているのである。そのような折り、敵軍がその国を襲ってきて、リヴァリーンは瀕死の重傷を負ってしまった。ブランシェフルールは家庭教師の仲介により、変装して病床の彼を訪ねて、彼とともにこの世で最高の歓びを享受し、子供を身ごもってしまう。こうして二人は秘められた愛を享受し合ったが、その歓びは長くは続かなかった。かつての敵モルガーンが再び故国に侵攻したとの知らせを受けたからである。リヴァリーンはブランシェフルールと別れなければならないことを悲しむが、彼女と相談の結果、マルケ王には内緒で彼女を連れて帰国し、主馬頭（しゅめのかみ）ルーアルの勧めに従って正式に結婚式を挙げた。しかし、その歓びも束の間、リヴァリーンはモルガーンとの熾烈（しれつ）な戦いで最期を遂げてしまう。その知らせを受けたブランシェフルールも男子を出産するや否や、その悲しみのために死んでしまう。忠義者の主馬頭ルーアル夫妻がその幼子を人目から隠し、自分たちの子供に仕立てて、その子に「悲しみ」（トリステ）の意味に由来する「トリスタン」という名前を付けて、育てた。トマ系のゴットフリートでは、このように父はトリスタン誕生のときにはすでに死んでしまっており、ベルール系とは異なっていることが理解できよう。

トリスタンの両親の物語はこのように二つのタイプに分けられるが、この二つのうち、サトクリフは基本的には前者のベルール系に従い、ところどころで多少の変更を加えながら、物語を展開させている。それによると、コーンウォールのマルク王がまだ若い頃、コーンウォールとアイルランドの間には争いが繰り広げられており、この戦いの知らせを聞いたロシアン（スコットランド南東部）のリヴァリン王は、優れた戦士を集めてコーンウォールへ加勢に出かけた。マルク王はその援助を喜び、二人して海の彼方の敵と戦い、勝利を収めたのち、リヴァリンに美しい妹を妻として与えた。リヴァリンはその姫とすでに相思相愛の仲であったので、喜び、心はずませて、王女を故国に伴い帰った。一年の間、二人は幸福に暮らし、息子が生まれたが、その赤ん坊が生まれ落ちた日に母である王妃は亡くなった。リヴァリンはその子供に「悲しみ」を意味するトリスタンの名前を与え、その子を王妃の国からついて来た老いた乳母と宮廷の侍女たちの手に委ねた。

このようにサトクリフはベルール系に従って物語を淡々と展開させているが、生まれ

た子供に悲しみを意味する「トリスタン」という名前をつけている限りでは、トマ系のゴットフリートの影響も考えられる。概して主人公の名前に「悲しみ」（トリステ）という意味が関係づけられるのは、トマ系においてであり、その記述が見出されるトマ系の作品としてはゴットフリートが現存する最古の作品である。ゴットフリートはこの名前の由来を挙げているのみならず、そのほかたびたび物語の展開の途中でしばらく立ち止まって、一つ一つのエピソードを詳細に述べることを特徴としており、主人公の両親の恋愛に関しても、のちの主人公たちの愛の物語を彷彿（ほうふつ）とさせるような一つの独立した物語へと発展させている。これに対してサトクリフの作品は、主人公トリスタンの生い立ちに関してはなるだけ簡潔明瞭に述べることに努めていることが容易に理解できよう。

2. トリスタンの養育

このようにベルール系では主人公の父は生き延び、トマ系では戦死することになっているので、その後の主人公の養育に関しても両者間には自ずと相違が出てくる。

トマ系のゴットフリートから先に紹介すると、リヴァリーンの死後、その幼子は忠義者の主馬頭ルーアル夫妻にわが子として引き取られ、最初の七年間はその夫人に養育され、その後一人の聡明な人物を付けて遊学のため外国に送られる。そこでトリスタンは語学と武芸を修めて、十四歳のときに故郷パルメニーエのカノエールに呼び戻される。ところが、ある日、故郷にノルウェー船が停泊したのがきっかけとなって、トリスタンは誘拐され、その後さまざまな苦難を乗り越えて、しまいには巡礼者としてティンタヨールのマルケ王のもとに赴く。忠義者ルーアルはトリスタンを探し出す旅に出かけ、数々の苦労の末、やっとマルケ王のもとでトリスタンを見つけた。そこで初めてトリスタンはマルケ王の甥だと分かり、刀礼式を授けられたあと、一旦故郷カノエールに帰国してから、領国をルーアルに与えて、自分はまたコーンウォールのマルケ王のもとへ出かけることになっている。このようにトマ系のゴットフリートでは、トリスタンは誘拐による旅も含めて数々の旅を繰り返したのち、最終的にはマルケ王のもとに落ち着くのであり、それらの一つ一つのエピソードが詳しく展開されているところに特徴がある。

これに対してベルール系の民衆本では、リバリン王自らが幼子トリストラントを乳人（めのと）の手に委ねて、王族にふさわしい養育を施させている。やがてトリストラントがさまざまな書物に親しむまでに成長すると、次にはクルヴェナルという名の師が迎えられて、学問のみならず、さまざまな武芸の術が授けられた。こうしてトリストラントはさまざまな苦難や試練に一人でも充分に立ち向かえるまでに成長すると、師クルヴ

ェナルの進言に従って、父リバリンに旅立ちの許可を願い出て、見聞を広めるために師クルヴェナルと数人の従者を伴って旅に出かけて行くのである。目指したのはマルク王のクルネヴァル（コーンウォール）の国であったが、そこに到着すると、トリストラントは素性を明かさずにマルク王に仕えることを願い出て、マルク王よりその臣下に加えられるとともに、さらには王の司厨長ディナスから事細かな世話を受けて、そこに暮らすことになる。このようにベルール系では主人公トリストラントの養育は簡潔に展開され、トマ系におけるような放浪の旅のエピソードは一つもなく、一人前になるとただちにマルク王のもとに赴いている。

サトクリフはおおむねこのベルール系に基づいて自らの物語を展開させている。七年が過ぎ去ると、父リヴァリンは息子トリスタンを女たちの手から引き離して、ゴルヴナルに託して王子にふさわしい鍛練を施させている点でも同じである。ただこのゴルヴナルはベルール系ではかなりの経験と教養を積んだ師匠であるが、サトクリフでは「若者」として登場し、この若者は王子を幼い弟のように愛して、さまざまな技を教えるのである。さらにサトクリフでは王子はそのほかにも多くの教師について、勇者の技を習い覚えたり、竪琴を独力で弾くことを覚えたり、十二歳の頃には鳥の声をまねることもできるようになったとされている。

やがて十六歳になると、ゴルヴナルがトリスタンに見聞を広めさせるため、旅立ちを勧めるのであるが、その点でもベルール系の民衆本と同じである。このゴルヴナルの助言に従って、トリスタンは翌日、父王のもとに出かけて、「ロシアンの国境の外にある世界を見てみたい」と言って、旅立ちの許しを求める。父王はそれを聞いて喜び、息子の求めた船を与える約束をして、冬の嵐が去ってから出発することを認める。その際、民衆本では行き先のことは記述されていないが、サトクリフでは父王が行き先を尋ねると、トリスタンは「是非とも母の国コーンウォールに行きたい」と答えている。サトクリフによって明記されているこの動機は、現代の読者にはよく理解できるものであり、サトクリフはできるだけ現代の読者を納得させる記述を心がけていることが明らかである。

冬の嵐が過ぎて、トリスタンがゴルヴナルと数人の若者を連れて旅立ち、コーンウォールの王城ティンタジェルに近づいたときにも、ベルール系の民衆本では「一計を案じて」自分がどこの国の何者であるか、どのような素性であるかを明かしてはならないと家来たちに命じるのであるが、サトクリフでは「ロシアン王の息子であることや、この国の王の甥であることを利用せずに、おのれ一人の力で世界に名を上げたいからだ」と、自分の素性を隠す理由を明らかにしている。いくらか年長のゴルヴナルも、これを見上

げた考えだと思っており、トリスタンの自立性を強調する結果となっている。そのためティンタジェルに到着してマルク王に対面したときにも、民衆本ではトリストラントは名乗りもせずに、いきなりマルク王に自分を召し抱えてほしいと願い出ているのに対して、サトクリフでは「家来とあらば、姓名と生国を知っておく必要がある」とのマルク王の要求に従って、トリスタンは自分も含めて全員を実名で紹介したものの、「自分たちは商人のせがれで、ブリテンの辺境からやって来た」と嘘をついて、本当の素性は隠しておいた。このようにしてトリスタンはマルク王に仕えることになるが、その本当の素性は次のモロルトとの決闘の際に与えられた条件とうまく結び付けられて、初めて明かされるのである。

3. モロルトとの一騎打ち

このようにトリスタンの出生と養育に関しては、ベルール系とトマ系の間でかなりの相違が見られるが、次のモロルトとの一騎打ちのエピソードにおいては、多少の差こそあれ、大筋ではほぼ同じであり、サトクリフもそれらに従っている。

サトクリフに基づいてあらすじを辿っていくと、トリスタンがマルク王に仕えて二年が経過したとき、その国に深刻な災いが降りかかった。以前から争いを続けてきたアイルランドにモロルト（民衆本ではモルオールト、ゴットフリートではモーロルト）という偉大な勇士が現れ、彼はアイルランド王の妹を娶っていたが、このたびコーンウォールへ使者を送って、十四年間怠っていた貢ぎ物を差し出せと要求してきたのである。しかもモロルトはこのように長く貢ぎ物を怠っていたうえは、穀物や家畜ではすまぬ、すべて奴隷で支払うよう、それも十四年間に生まれた子供の三人に一人を差し出すようにと迫った。そしてそれを断るならば、戦いで雌雄を決するが、それが嫌なら、自分モロルトに劣らぬ勇士を代理戦士に立てて、一騎打ちをするようにと要求してきたのである。

その際、モロルトは決闘に応ずる者は「自分と同等の身分の者でなければならない」という条件を付けているが、この条件は民衆本には取り入れられているのに対して、ゴットフリートには見られない。ゴットフリートではトリスタンがマルケ王の甥であることはすでに忠義者ルーアルによって明らかにされているからでもあろう。トリスタンの身分がモロルトとの決闘の条件と結び付けられて明らかにされるという点でも、サトクリフはベルール系に従っていることが確認できよう。ただベルール系の民衆本ではトリストラントがその前に後見役のディナス公に騎士叙任を願い出て、その叙任式が行われたあとで初めてモルオールトと戦うことを宣言し、自分はマルク王の甥であることを明らかにしているのに対して、サトクリフでは最初からマルク王の家令ディナスにモロル

トと戦う決意を述べ、そのあとで決闘の条件を満たしている証拠として自らの身分を打ち明けるのである。サトクリフではベルール系に見られる副次的なエピソードは削除されて、物語の展開がスピーディになっていることが理解できよう。

こうしてサトクリフのトリスタンは三日後に、コーンウォール海岸の小島（民衆本では中洲）でモロルトとの一騎打ちに挑むのであるが、このモロルトとの決闘についての叙述は、大筋においてベルール系の民衆本およびトマ系のゴットフリートとほぼ同じ展開である。

サトクリフに従って展開を辿ると、トリスタンは舟で小島に着き、馬を引いて上陸するや否や、舟を押しやって波に任せてしまう。それを奇妙だと思うモロルトに対して、彼は「この島に来たのは二人だけだが、舟に乗って戻るのは一人のはずだ」と自らの決意のほどを示す。モロルトはトリスタンの若さと経験の少なさをその目の奥に読み取って、この青二才を打ち取ってもたいした満足は得られないと思って、和睦の手を差し出そうとするが、トリスタンが最後まで戦う態度を示したので、二人は馬に跨がり、一騎打ちを始めた。激しい戦いの末、トリスタンも傷を負わされながらも、ついにモロルトの右手を切り落とし、次の剣の一撃は相手の頭をとらえた。しかし、その剣は深く食い込んでいたので、剣を引き抜いたとき、その破片がモロルトの頭蓋に残ってしまった。ただゴットフリートにおいてはこの決闘の場面で特筆すべきは、モーロルト（モロルト）がトリスタンの太腿（ふともも）に一撃を与えたとき、「その傷を治すことができるのはアイルランドの王妃で、私の妹イゾルデだけだ」と言っていることである。これはトマ系独自の特徴であり、そののちのあらすじの展開に大きな影響を与えることになる。

従って、このあとモロルトの頭蓋に残ったトリスタンの剣の破片を保管しておくのも、トマ系のゴットフリートではアイルランド王妃である。すなわち、その作品ではモーロルトの遺骸がアイルランドに運ばれると、その妹であるアイルランド王妃がその頭蓋の中に剣の破片を見つけて、それを小箱に入れて大切に保管しておくのであり、その娘もそのときそこに居合わせたことになっている。

これに対してベルール系の民衆本では、剣の破片を保管しておくのはアイルランド王の娘イザルデである。しかも彼女は医術に長（た）けていたことになっていて、自らが伯父モルオールトの倒れている場所に馳せつけ、そこで亡骸の傷を調べようとしたとき、剣の破片を見つけて、それを大切に保管しておくのである。

サトクリフでも、このベルール系と同じように、剣の破片を保管するのはアイルランド王の娘イズーであるが、この作品ではモロルトは戦いのあとなおも血を流しながら、舟をもやったところまで逃げ延びて、そこに迎えに来ていたアイルランドの船団に助け

られてひとまずアイルランドまで帰ることになっている。そこですぐに国王の娘イズーに使者が送られ、癒しの技に長けていた彼女はモロルトのもとに急ぐ。しかし、彼はすでに傷のために息を引き取ったあとであった。イズーは死者の頭蓋に剣の破片が刺さっているのを見つけ、それを抜き取り、絹の布に包んで保管しておく。このように見てくると、サトクリフは大筋ではベルール系に従っているが、細かな点では多少の相違を示しながら展開していることが理解できよう。

4. 癒しの旅

いずれにしても小島の決闘ではトリスタンが勝利を収めたが、しかし、トリスタン自身も重傷を負い、あれこれと傷の手当てを受けたものの、どんな処方も効き目がなかった。傷を受けた剣には毒が塗ってあったからである。トリスタンの身体が日一日と弱っていくのは、どの作品においても同じである。ただその後の癒しの旅に関しては作品によってかなりの違いが認められる。

まったく異なる独自の展開を見せているのが、トマ系のゴットフリートである。この作品ではモーロルトから傷を受けた際、その傷を治すことのできるのはモーロルトの妹、すなわち、アイルランド王妃イゾルデ以外にはいないと宣言されていたので、トリスタンは傷を治すためには彼女のもとへ行くしかない。このままでは死ぬだけだと悟った彼は、ついに従者を連れて、アイルランドの王妃イゾルデのもとへ船出するのである。アイルランドに近づくと、その都ダブリンの手前で錨を下ろして、トリスタンは一人だけ小舟に移り、随行の者たちを帰国させた。翌朝、ダブリンの人々は小舟の中にトリスタンを見つけ、楽人と称する彼から冒険譚と竪琴の弾奏を聴いて感嘆する。彼らはやつれた楽人をあわれに思い、医者の看護に委ねるが、回復の兆しは見えない。この噂は王妃イゾルデの耳にも届き、王妃は楽人を宮廷に連れて来させる。トリスタンは楽人タントリスと偽称し、王妃とその娘の前で竪琴を弾いて聴かせる。王妃が彼に治療を施すと、やがて傷も癒えて、トリスタンは王女イゾルデの音楽と外国語の教師として仕えることになる。このようにトリスタンは最初のアイルランド訪問の際に王女イゾルデと出会っているばかりか、家庭教師の世話までしており、そこにトマ系の特徴がある。このことがのちに大きな意味を持つことになるのである。しかし、トリスタンはこのあと素性を知られはしないかとの不安から、彼女たちに暇乞いを申し出てマルケ王のもとに帰ることになっている。

これに対してベルール系の民衆本では、トリストラントの傷を治すのはアイルランドの王妃ではなく、王女イザルデである。ただ決闘の際にモルオールトによってその傷を

癒す者については何も触れられていないので、トリストラントはいよいよ弱り果てて死に近づくと、ただ一縷（いちる）の望みを抱いて小舟で行き先も決めずに大海に乗り出すことになっている。

サトクリフも、多少の相違はあれ、この民衆本に従っている。その後の展開をサトクリフに基づいて示すと、トリスタンの小舟は幾日も海を漂ったのち、アイルランドに辿り着くが、ちょうどそのときアイルランド王が岸辺に居合わせて、トリスタンは「名前はデメスター（民衆本ではプロ）という吟遊詩人で、故郷はブリテン（民衆本ではセギンセスト）。海賊に襲われて、瀕死の傷を負ってこの地に辿り着いた」と説明する。すると国王は負傷者を助けようとして、娘イズー（民衆本ではイザルデ）に使いをやって、その傷に効く薬を届けさせた。その薬のおかげでトリスタンの腐っていた傷はすっかりきれいになるのである。やがて旅を続けられる身体になると、民衆本ではトリストラントは恩返しのためにイギリスへ出かけて食糧をアイルランドに届けさせる手筈を整えてから、伯父マルク王のもとに帰って行くが、サトクリフではそのままウェールズへ向かう船に乗り込んで、さらにウェールズから別の船に乗り換えてコーンウォールへ帰って行くことになっている。多少の相違はあるものの、今回のアイルランドへの旅ではトリスタン（トリストラント）がそこの王女イズー（イザルデ）に会わないままに終わったという点でも、サトクリフはベルール系に従っていることが容易に確認されよう。

第三章　マルク王の求婚

1. マルク王結婚の条件

こうしてトリスタンはひとまずコーンウォールへ帰って、マルク王のもとで暮らしているうち、マルク王が結婚相手を探すあらすじへと展開していくが、このマルク王の求婚に関してもベルール系とトマ系では著しい相違が見出される。

ここでもトマ系のゴットフリートから先に紹介すると、マルケ王の顧問官たちは、国王に可愛がられるトリスタンへの妬みから、国王に妻を娶って、世継ぎを儲けるようにと進言するものの、マルケ王はトリスタンを後継者に決めているからと言って、それを断る。彼らのトリスタンに対する嫉妬と憎しみはますます増していって、トリスタンは宮廷を去りたい気持ちにまでなる。そのようなとき宮廷顧問官たちは、トリスタンが礼讃してやまないアイルランドのイゾルデ姫との結婚をマルケ王に進言して、敵国の王女に求婚するという難題とともに、その求婚の使者としての役目をトリスタンに押しつけた。マルケ王は反対するが、トリスタンはそれを承諾して、顧問官たちとともにアイル

ランドに向けて再度旅立って行くのである。

これに対してベルール系の民衆本では、マルク王の結婚の条件はマルク王自らが出すことになっている。トマ系では宮廷顧問官たちがトリスタンに難題を押しつけるために、アイルランドの王女への求婚を進言したのであったが、このベルール系では逆に結婚の意志のないマルク王が、執拗に婚姻を主張する家臣たちに、それをあきらめてもらおうとして、自らがむずかしい結婚の条件を考え出すのである。なかなか考えのまとまらないうちに、約束の三日目となって、マルク王が諸侯を待ち受けていたとき、二羽の燕が空を飛び回りながら、嘴（くちばし）で何かを取り合っていた。そのうちそれが燕の嘴から落ちてきて、マルク王が手に取ってみると、女の長い髪の毛であった。それは見たこともないような色の髪で、このような髪の女はこの世に一人しかあるまいと考えて、マルク王は集まって来た諸侯に向かって、「結婚するが、相手はこの髪の毛の持ち主でなければならぬ」という実現困難な条件を差し出すのである。この条件は明らかにケルト伝説の『デアドラとウスナの子たちの死』に見られたエピソードをヒントにしてトリスタン伝説に取り入れたものである。

サトクリフもこの伝統的なケルト伝説に近いベルール系のトリスタン伝説に従って自らの物語を展開させている。サトクリフがなるだけ伝統的なケルト伝説の要素を自分の作品の中に織り込もうと努めていることが明らかである。

2. アイルランドでの竜退治

いずれにしてもそれぞれの難題をつきつけられたトリスタンは、マルク王の求婚の使者として旅立つのであるが、トマ系ではすでにアイルランドという目的地が決まっているのに対して、ベルール系とサトクリフでは反対にアイルランドだけは避けるようにして船を進める。しかし、大時化（おおしけ）にあって、ベルール系でもサトクリフでも結局トリスタンはアイルランドに到着する。そこで展開される竜退治のエピソードは、多少の違いはあれ、ベルール系もトマ系もほぼ同じ展開を見せている。このエピソードは、おそらくトリスタン伝説の原型が出来上がって以来、少しも変更されずに語り継がれてきたものであろう。

その後の展開をサトクリフに従ってまとめると、トリスタンがアイルランドに着いたとき、その地は恐ろしい火を吐く竜に悩まされていた。モロルトが亡くなった今は、誰一人としてその国土を焼き払って荒らす竜に歯向かうことはできなかったのである。そこで国王はその竜を殺した者には娘イズーを嫁に与えるという触れを出した。無鉄砲な若者が何人も竜に挑んだが、これまで皆失敗して、竜の犠牲となった。このことを聞き

知ったトリスタンは竜と戦う決意をするが、サトクリフではその段階ではまだ例の髪の毛の持ち主がそのアイルランドの王女であるとは知られていないので、トリスタンはあくまでも「その怪物を倒したら、仮に自分たちをコーンウォール人と知っても、アイルランド王は殺しはしないだろう」ということを動機として、竜の洞窟へ出かけている。その途中で騎馬の男らが逃げ出すのに出くわし、それで竜の居場所が分かり、トリスタンは竜と戦う。火を吐く竜に苦戦を強いられるものの、トリスタンはついに竜の心臓に剣を突き刺して、竜を倒したのち、竜の顎をこじあけて、剣でその舌を切り取った。しかし、トリスタンもその戦いで傷を受け、しかも身体はまだ熱にあぶられているようだったので、竜の巣穴から流れ出る小川へよろけ込み、頭だけを水面に出した状態で、気を失ってしまった。

このときの竜の最後の咆え声を聞いて、その戦いの場に現れたのがマルク王の家令（サトクリフでは Steward という英語、民衆本とゴットフリートでは Truchseß というドイツ語を使っていて、「司厨長」あるいは「内膳頭」という訳語をあてている）である。彼は以前から王女イズーに恋をしていたが、自分では竜に立ち向かう勇気はなく、自分より強そうな勇士が竜退治に出かけるときにはこっそりとついていって、竜退治がうまくいきそうなときには自分も一枚加わろうと企んでいた。彼は少し前にトリスタンが出くわした男たちの中の一人であり、その咆え声を聞いて竜がついに倒されたと思って、その場に戻って来たのである。竜を殺した勇士の姿はどこにも見あたらなかったので、おそらく竜に食われてしまったのだろうと家令は考えて、剣を竜の死骸に切りつけてから、ウェクスフォードの街に急ぎ、従者らとともに車を持って来た。そして竜の首を切り落とすと、その首を車で国王のもとに運び、それを証拠として王女イズーを自分の妻にと要求するのである。

3. 燕の髪の姫君と剣の刃こぼれ

こうしてサトクリフでは王女イズーは家令が竜を退治したという話を聞くと、それは嘘で、家令が他人の手柄を横取りしたに違いないと思って、竜退治の行われた場所に出かけるのであるが、この場面はベルール系とトマ系では多少の違いが見られる。

トマ系のゴットフリートから先に紹介すると、内膳頭の竜退治が嘘であると最初に悟ったのは、王女イゾルデではなく、王妃イゾルデの方であり、王妃イゾルデが娘イゾルデのほかに侍女ブランゲーネと小姓パラニースを連れて、その場所に急ぐ。そこで王女イゾルデが一番最初に倒れている勇士を見つけ、女性三人でその勇士の武装を解きにかかったとき、王妃は懐に竜の舌を見つけ、運が向いて来たことを喜ぶとともに、この竜

の毒気のために勇士が体力と意識を失ったことを悟った。それから王妃が解毒剤を取り出して、勇士の口の中へ流し込むと、まもなく勇士は意識を取り戻した。あたりを見回すと、トリスタンはすでに顔馴染みの王妃イゾルデと王女イゾルデ、さらには侍女ブランゲーネが自分を取り巻いているのに気がついた。そのうち王女イゾルデもその勇士が「楽人タントリス」であることに気づいた。こうしてトリスタンは館に運ばれ、この国に来たわけを尋ねられると、「略奪者に襲われてアイルランドにやって来た」と作り話をしてから、竜を倒せばこの国での滞在が許されるものと思って、そうしたのだと説明するとともに、内膳頭と戦う用意のあることを伝えた。やがてこの一件を話し合う評定の席で、王妃は竜を倒したのは内膳頭とは違う人だと主張すると、内膳頭はそれは嘘だと言って、その者と果たし合いをすることを申し出た。その決闘のために王女イゾルデが小姓パラニースに勇士の甲冑と武器を磨かせたとき、その剣に刃こぼれを見つけ、それがモーロルトの頭蓋骨に残っていた剣の破片と一致するのを確認すると同時に、トリスタンとタントリスの名前が前後の置き換えに過ぎないことにも気づいた。彼女は復讐の念に駆られて、トリスタンが入浴しているところを襲うが、そこへ王妃が入って来て、それを制止する。しかし、王妃自身も昔を思い出して、激昂してくる。そこへ介入してきた侍女ブランゲーネのとりなしと助言によって、彼と彼女たちとの和解が成立する。さらにここでトリスタンは、イゾルデ姫を妻に迎えたいというマルケ王の意向をも伝えている。それを聞いたアイルランドのグルムーン王もこれに同意し、両国の和解も成立する。こうしてあらすじは三日後の裁判へと展開していくのである。

これに対してベルール系の民衆本では、王の家令が竜を倒したことを嘘だと思うのは、王女イザルデであり、彼女は家令が他人の手柄を横取りしたに違いないと思って、侍女ブランジャンと侍従ペレニスを連れて、竜の死骸が横たわっているところへ出かけて行く。彼女はしばらくあたりを探し回ってから、ついに勇士が水の中で倒れているのを見つけた。三人は生気を失った騎士を連れ帰り、王女イザルデが傷に効く香油を彼の身体に塗り、傷に手当てを施して、彼に湯を使わせると、彼はまた元通りの元気を取り戻した。そのとき彼は自分の携えてきた髪がこの女性のものであることにも気づいて、この乙女こそ探し求めていた姫に違いないと悟るや否や、自然にほほ笑むのを隠し切れなかった。その「ほほ笑み」が気になった王女は、剣を手入れせずにおいたので、笑ったものと解釈し、勇士の剣を磨こうとしたとき、刃こぼれに気づき、勇士がモーロルトの殺害者であったことが分かってしまう。彼女の心には勇士に対する敵意と憎悪が溢れ出て、彼女は勇士に伯父殺害の償いをしきりに要求する。そこへ侍女ブランゲルが入って来て、司厨長が腹黒く国王を説き伏せていることを指摘しながら、彼女を説得すると、イザル

デは幾分か心を動かされて、トリストラントへの怒りを和らげた。最後には彼をやさしく抱いて、愛らしくその唇に接吻して、敵意と憎悪を忘れてしまった。さらにそのうえイザルデは父王に向かって、竜を退治したその真の勇者が以前にいかなる所業をしでかしていたにしても、それを赦してあげるようにと頼み、父王もまたそれを約束した。

上記二つの伝承のうち、サトクリフが素材として用いたのは、後者のベルール系である。ただサトクリフは、王女イズーが意識を失った勇士を見つけた際、彼女独自の挿入エピソードとして勇士の首には真紅の絹の小袋がかけられ、鎧の中にはもう一つの袋を入れていたことにしている。王女は首の小袋はそのままにしておいたが、鎧の中の小袋は取り上げた。彼女はその形と匂いからして竜の舌が入れられていると確信してから、負傷者を連れてウェクスフォードの屋敷に戻る。さらにそこで勇士の介抱をする場面でも、サトクリフはトリスタンがモロルトの殺害者であることも悟るきっかけとなる伝統的な「ほほ笑み」のモチーフを削除している。その代わりに彼女独自の絹の小袋を用いて、その場面を新たに展開させている。それによると、王女イズーの秘伝によって目覚めた勇士は、その女性の輝く髪を見て、この女性こそ探し求めている髪の毛の女性に違いないと確信し、首にかけていた絹の小袋を探した。その中に例の髪の毛を入れていたからである。勇士がそれを探しているのに気がついた王女は、その小袋を大切にしまっていることを伝えるとともに、竜の舌を入れておいた銀の鉢をも持ち上げて見せた。竜を殺した証拠となる竜の舌を大切に保管していた王女から事情を聞いて、勇士はこの女性こそイズー姫であることを知った。そのあと勇士が眠っている間に、王女イズーは勇士の剣を磨こうとしたときにその剣に刃こぼれがあることに気づき、この勇士こそモロルトの殺害者であると悟るのである。そこで王女イズーは伯父を殺した勇士トリスタンに憎しみを抱き、彼を殺そうとするが、侍女ブランジャンに引き止められて、トリスタンを許すことになるのは、「この勇士がいなければ、姫は王の家令と結婚しなければならなくなる」という侍女ブランジャンの説得であり、この点ではベルール系もトマ系も、またサトクリフもほぼ同じである。

4. マルク王の花嫁

こうして王女イズーはトリスタンと和解し、三日後に行われた裁判でトリスタンを父王の前に連れ出し、竜の舌を証拠として、竜退治の偽者の悪事をあばくのであるが、この場面では竜の舌のエピソードが挿入される箇所とともに、王女イズーがマルク王の花嫁となるきっかけに関しては、作品によって多少の違いが認められる。

まずトマ系のゴットフリートでは、トリスタンとイゾルデとの和解が成立する前に、

トリスタンがイゾルデ姫を妻に迎えたいというマルケ王の意向を伝え、それを聞いたアイルランドのグルムーン王もそれを了承したことはすでに述べたが、そのときグルムーン王がその結婚話に同意したのは、その婚姻によって長年アイルランドとコーンウォールとの間に繰り広げられた争いも解決すると考えたからである。こうして結婚話がまとまったあとで、ようやく証拠としての竜の舌のエピソードが展開されている。

これに対してベルール系の民衆本では、逆にまず竜の舌のエピソードが展開され、竜の舌を持ち合わせているトリスタンこそ竜を退治した勇士だということが証明されたあとで、初めてトリストラントは姫イザルデを自分の伯父マルク王の妃にしたいということを申し出る。そのときトリストラントは、「姫君は騎士風情（ふぜい）の自分と夫婦になるよりは、権勢高く貴い身分である伯父の妃となった方が、はるかに手厚くもてなされて、幸せになれるだろう」という理由を挙げている。するとアイルランド王の方も、「トリストラントがモルオールトを殺したことを気に病んで、また娘イザルデもそれを忘れることができずに、いつまでも彼にわだかまりを残すとあれば、若い二人が結婚したとしても理想の夫婦にはなれまい」と考えて、トリストラントの提案を承諾するのである。

サトクリフは基本的にはこのベルール系に従ってあらすじを展開させているが、最後の場面ではトマ系をも参照している。すなわち、サトクリフではまず竜の舌のエピソードが展開され、王の家令の悪事があばかれたのち、トリスタンはまず最初に二年前にモロルトを殺害したことを打ち明けてから、マルク王の求婚の話を持ち出している。それを聞いたアイルランド王は、トマ系のゴットフリートと同じように、「アイルランドとコーンウォールは長年、いがみあってきたが、アイルランドの王女がコーンウォールの王妃となれば、二つの国は平和になる」と考えて、娘をマルク王の花嫁とすることに同意するとともに、トリスタンの竜退治はモロルト殺害を十分に償うものとして、トリスタンのかつての行為を許したのである。ただこの場面でサトクリフでは、王女イズーはトリスタンの提案を聞いたとき、「あらぬかたを見ていた」と記述されており、また最後には「この日、イズーは王家の広間にあって、トリスタンの方を見もせず、一言も言わぬままであった」と締め括られている。この王女イズーの沈黙は何を意味するのであろうか。それについては結びで触れることにするが、サトクリフは伝統的な伝承に従いながらも独自の物語を作り出そうと努めていることが、このあたりからも窺い知ることができるであろう。

第四章 トリスタンとイズーの逢瀬

1. 花嫁イズーの船旅

こうしてアイルランドの王女イズーはマルク王の花嫁としてコーンウォールへ向けて旅立つことになるが、このコーンウォールまでの船旅においてサトクリフは、ベルール系でもトマ系でも重要な役割を果たしてきた伝統的な「愛の薬」のモチーフを削除するという大胆な改作を行っている。

まず伝統的な「媚薬」を取り入れているベルール系の民衆本から見ていこう。そこでは王女イザルデがマルク王のもとへ嫁いで行くにあたって、母后は魔法の秘薬とも呼ぶべき薬を調合して、ブランゲルにそれを託し、新郎新婦が初夜の床についたとき二人にそれを飲ませるようにと命じた。それは愛の秘薬であり、それを口にした者は、たとえ一日といえど会わずに過ごせば二人とも病に陥り、また会う日まで身も心も引き裂かれるという薬であった。ただその薬の効力には四年間という期限があり、四年の歳月が経てば、魔薬ゆえの愛は冷えてしまうという。とはいえ、媚薬の力による愛が冷えてしまったのちも、なおまことの愛の炎が力を発揮することになるとも言われていた。王女イザルデはマルク王の花嫁としてトリストラントに導かれて侍女ブランゲルらとともに船に乗り込み、船は出発した。トリストラントは花嫁イザルデに心を配って、船の中に特別な部屋をしつらえた。トリストラントは船旅が長引かぬよう、船びとたちに船足を速めよと命じたが、イザルデ姫は旅路を急ぐのに耐え難く、どこかの岸辺に近づいたときには、皆陸に上がって休息を取るようにと願った。その願いはまもなく叶えられて、船に乗っていた人々はほとんどの者が到着の土地を見物するために上陸した。ただイザルデ姫は船に残った。そこでトリストラントは姫の身を気遣って、その部屋を訪れ、いろいろなことに打ち興じて、時の経つのを忘れさせようと努めていたが、そのうちひどく喉の渇きを覚えて、何か飲み物を、と求めた。すると幼い侍女が例の秘薬の隠されていた場所へ行き、その薬を持って来た。トリストラントはそれを一気に飲み、まことに甘美な味わいであったので、それをイザルデ姫にも勧めた。二人がそれを飲み干すや、二人の間には焼けつくような愛の炎が一気に燃え上がったのである。それ以降というもの、愛はあまりにも烈しく、苦悩は増して、心は千々に乱れ、両人は三日半の間、何も喉を通らず、眠ることも叶わず、床に臥せっていた。やがてブランゲルは例の媚薬がなくなっていることに気づき、二人の病いの原因を突き止めると、クルヴェナルに事情を話して相談した。そこで船がまたとある港に停泊して、ほとんどの者が船を降りたとき、クルヴェナルはトリストラントにイザルデ姫を見舞うよう勧めた。トリストラントは姫

の船室に赴くと、姫の傍らに歩み寄り、姫と並んで腰を下ろして語らい始め、やがて二人は互いに心密かに抱いていた恋心と想いのたけを打ち明け合った。愛は勝利を収め、二人はすっかり元どおりの元気を取り戻し、こうして二人の愛は日を重ねるごとに新鮮な歓びを見出した。しかし、恋人たちに残された時間は、マルク王のもとに着くまでの限られた時間であった。そこに近づくにつれて、二人はマルク王をどうしたら欺けようか、この先どのようにしたら二人の愛を貫き通せるものかと、互いに思案をめぐらした結果、忠実なブランゲルの力を借りることにした。そこでイザルデ姫はブランゲルに、初夜の晩にはマルク王とともに寝床に入ってくれないかと頼んだ。ブランゲルは最初は断りはしたものの、自分の不注意からこのような結果になったので、最後には姫の頼みを受け入れることにした。こうして船はまもなく目的地に到着するのである。

トマ系のゴットフリートでも、あらすじの展開はこのベルール系の民衆本とほぼ同じである。ただゴットフリートにおいては、コーンウォールへ向けて出帆した船の中でトリスタンはイゾルデ姫を慰めるが、そのとき姫は伯父モーロルトの死を思い出して、トリスタンの親切を拒み続けている。イゾルデがトリスタンに憎しみを抱いたままの状態が続いている中で、二人は偶然例の媚薬をぶどう酒だと思って飲み干すや否や、二人の間には激しい恋の炎が燃え上がるのである。十九世紀になってワーグナーが楽劇『トリスタンとイゾルデ』[32] を作り上げたとき、第一幕の素材としたのは明らかにこのゴットフリートの作品である。イゾルデの憎しみが強ければ強いほど、愛の媚薬を飲んだのちの二人の愛はそれだけいっそう激しく燃え上がるのである。聡明なブランゲーネは二人が恋の苦しみに悶え苦しんでいるのに気づいて、二人の衰弱した様子に胸を痛め、二人に物思いの原因を尋ねると、トリスタンはイゾルデ姫に恋をしていることを告白する。そのときゴットフリートの特徴として、トリスタンはブランゲーネが自分たち二人の恋の邪魔になると非難している。ゴットフリートではブランゲーネが自ら進んで苦しむ二人を愛で結ばせようとするのではなく、逆に二人がブランゲーネを邪魔者扱いして、ブランゲーネを遠ざけるのである。ブランゲーネはそれを甘受して、ただこの秘め事を他人に漏らさないよう忠告してから、恋人たちを二人きりにしている。このあと二人が愛で結ばれる場面でも、ゴットフリートは彼特有の「医者である愛の女神」という擬人化を用いて、その「愛の女神」が二人の体と心を結び付けたと表現している。こうしてトリスタンとイゾルデは幸福な日々を送るが、やがてコーンウォールに近づいて来ると、イゾルデが愛してもいないマルク王のものになるということに加えて、彼女がもはや処

32) リヒヤルト・ワーグナー(高辻知義訳): 前掲書

女でないことが二人の心を苦しめ始めた。思い悩んだ末、イゾルデはついに良策を見つけて、ブランゲーネに初夜の晩の身代わりを依頼するが、最初のうちはブランゲーネが拒みはするものの、自分の不注意からこのような結果になったことに責任を感じて、身代わりになることを引き受けるのはベルール系の民衆本と同じである。

以上の伝統的な二つの伝承に対して、サトクリフはこの花嫁の船旅の場面で「媚薬」を削除するという大胆な改作を施している。まず二艘の船で出帆する点では、伝統的な伝承と同じであるが、サトクリフではそのうち風が強くなり、波も高くなったので、ゴルヴナルの小さい方の船はそのままコーンウォールに向かい、トリスタンと花嫁イズーを乗せた船はウェールズの海岸の入り江で休息することになった。その場面でサトクリフ独特の物語が展開されている。すなわち、小さな入り江に錨を下ろすと、王女と侍女たちは甲板に上がって来て、船縁を越えて上陸しようとした。その際、トリスタンは船縁から降りて来る王女イズーを、両腕で抱えて、そのまま浅瀬を渡り、白砂の上に下ろしてやった。二人が互いに身体に触れたのは、これが初めてで、このとき二人はにわかに離れがたいかのように手を握り合った。この瞬間、「イズーの中の何かがトリスタンの中に、トリスタンの中の何かがイズーの中に入り込んで、命のある限りそれらを取り戻すことができなくなった」のである。しかし、二人はブランジャン以外の誰かに見られるのを恐れて、手を離した。この船縁を越えて上陸する際に二人の身体が互いに触れ合ったことが、のちに芽生えてくる二人の愛のきっかけとなるのである。

上陸した王女や侍女たちには木の枝で小屋が建てられ、女たちはそこで眠ったが、男たちは海岸の船の側で寝た。朝になると、よく晴れていたものの、沖は荒れていたので、もう一日待つことになった。トリスタンはそれを密かに喜んだ。彼は昨夜は一晩中眠られずに、イズーの小屋から光がもれるのを見つめていたのである。トリスタンが一人で砂の上に横になっていると、イズーがやって来て、見せたいものがあると言った。イズーが見せたのは、剣の破片で、トリスタンが自分の剣を抜き取ってみると、その破片は彼の剣の刃こぼれにぴたりと合わさった。これによってイズーは、かつてトリスタンが臥せっていたときに、すでにトリスタンがモロルト殺害者であることを知っていたが、なぜその身内の仇討ちをしなかったのか、その理由を言おうとしたものの、そのときは本心を表わすことができなかった。

イズーがやっと本心を打ち明けるのは、その日の夜になって、トリスタンが明日の船出を知らせるために彼女の小屋にやって来たときである。イズーは「海の波が収まらなければよいと思っていたのに。コーンウォールには行きたくない」と答えてから、剣の破片についての真実を知ったとき、トリスタンを殺さなかったのは、「あなたを愛して

いたからです」と告白した。もちろんそのときにはそれに気がつかなかったが、昨日トリスタンが自分を抱いて岸へ渡してくれたときに初めて気づいたという。「私の生命ある限り、私が従うのはあなただけです」と、自分の愛を告白するイズーの言葉に、トリスタンは心臓が二つに引き裂かれるのを感じ、「私はマルク王の臣下です」と答えたものの、イズーの積極的な言葉に押されて、「二人の身の破滅になるかもしれませんが、それでも愛しています、イズー」と、彼もまた自らの本心を打ち明けたのである。ここで想起されるのは、ケルトの伝説『ディアミッドとグライーネの駈落ち』や『デアドラとウスナの子たちの死』において女性の方が愛を告白して、駈落ちのイニシアティブを取っていることである。サトクリフがここでその二つのケルト伝説を頭に描きながら、遠い昔のケルト伝説的な雰囲気を表面に出そうとしていることは明らかである。こうしてトリスタンはイズーに両腕をまわして、きつく抱き締めると、彼女もひたと身を寄り添わせた。その二人の寄り添う様をサトクリフが、「さながらハシバミの木と、それにまつわるスイカズラのようであった」と表現したとき、その作家の脳裏に浮かんだのは、中世ヨーロッパに広まっていたトリスタン伝説というよりは、むしろ九世紀のケルト伝説であったのではあるまいか。サトクリフが「前書き」で「よくごらんになれば物語の下には、・・・ケルト伝説が透けて見えることでしょう」(10 頁) と言っているが、この場面もそのケルト伝説に属するものと考えてよいであろう。

トリスタンとイズーの二人はこうして愛で結ばれるのであるが、そのあとコーンウォールに近づくにつれて二人が再び苦しみを感じる場面は削除されており、さらにトリスタンとイズーが侍女ブランジャンに手助けを依頼するエピソードも削除されている。ややもすれば複雑に膨れ上がったトリスタン物語を、サトクリフはできるだけ簡潔明瞭なあらすじにまとめ直して、物語の展開をスピーディに進めているとも言える。スピーディな物語の展開にもサトクリフの特徴が認められるのである。

2. マルク王とイズーの結婚式

このあと展開されるマルク王とイズーの結婚式にまつわる物語についても、ベルール系の民衆本とトマ系のゴットフリートでは、侍女ブランジャンが初夜に身代わりとなったエピソードに続いて、彼女が殺害されそうになってもなおも忠誠を尽くすエピソードが語られているが、サトクリフではそれらのエピソードはすべて削除されている。その代わりにサトクリフはマルク王が花嫁イズーを出迎える場面では、独自のエピソードを挿入している。すなわち、船がティンタジェルに着くと、先着のゴルヴナルから事情を聞いていたマルク王は、花嫁イズーを出迎えに出るが、トリスタンがイズーの手を取り、

船縁を越えて彼女を王の前に連れ出したとき、彼女の手は氷のように冷たかった。そこでマルク王は両手で彼女の手を包んで、「そなたの手はひどく冷たいが、わしの手は大きいから暖めてやれよう」と言ってから、彼女の身体を引き寄せて、自ら首を曲げて口づけた。その様子からトリスタンはマルク王も彼女を愛していることを見て取るが、このマルク王がイズーの手を暖めてやる行為は、トリスタンの嫉妬と狼狽を表現しているとともに、のちの谷間での手袋のエピソードと有機的に結び付けられて、意味の深いものとなっている。このエピソードはこれまでの伝統的な伝承には取り入れられていない、サトクリフ独自のものである。こうして花嫁イズーを出迎えたマルク王は、それから十八日後に結婚式を挙げるのである。

3. 宮廷内の密告者

マルク王の妃となったイズーは、その後もトリスタンとの逢引を重ねているうち、どの作品においても宮廷内にそのことを国王に訴える人物が現れるが、その人物は作品によって異なっている。

まずベルール系の民衆本では、その人物は四人の伯爵とともにマルク王に仕えていたアウクトラートという大公であり、立派に立ち振る舞うトリストラントを妬み、常々彼を陥れることを考えながら、嗅ぎまわり、ついにトリストラントとイザルデの不義を見つけ出してマルク王に訴えるのである。最初は証拠がつかめずに、訴えたアウクトラートは逆に国王の反感を買ってしまうが、しかし、その後二度目の訴えでマルク王は二人の現場を押さえ、トリストラントには宮廷から退去することを命じ、王妃イザルデには見張りを厳重にするのである。

これに対してトマ系のゴットフリートでは、二人の恋人たちの不義を訴え出る人物は内膳頭マリョドーであり、内膳頭は王妃イゾルデを恋慕っているところがその特徴である。内膳頭は恋人たちをマルケ王に訴えるが、マルケ王は証拠をつかめないでいる点はベルール系の民衆本と同じである。ただゴットフリートではこの場面でさらにマルケ王と王妃イゾルデの知恵比べのエピソードが挿入されていて、そこで王妃イゾルデはマルケ王を巧みに欺き続けるので、内膳頭マリョドーは小人メロートを使って、国王に恋人たちの不義を訴えたため、国王はトリスタンに婦人部屋に近づかないように言い渡している。

これら二つの伝統的な伝承に対してサトクリフでは、訴え出るのはマルク王のもう一人の甥アンドレとなっており、トリスタンとイズーが小庭園で抱き合っているところを目撃して、マルク王に訴えるが、ベルール系の民衆本と同じように、この作品でも国王

は訴えたアンドレに反感を抱いている。しかし、アンドレの言葉がいつまでも気になり、トリスタンとイズーの様子を窺っていたある日のこと、マルク王はいきなり婦人部屋に踏み込んで、二人が抱き合っているところを発見するのである。マルク王は王妃に対しては何事もなかったかのように水に流すと伝えたが、トリスタンには城から出て行くようにと命じたのは、他の作品とほぼ同じ展開である。

4. 梨の木の下での密会

王妃イズーから引き離されたトリスタンは、その後王妃イズーの侍女ブランジャンの助言で、王妃の部屋を貫いて流れている小川に木片を流して、それを合図として逢瀬を重ねる。ケルト伝説に由来するこの逢瀬のエピソードは、ただその場所がベルール系の民衆本では果樹園の泉のほとりで、トマ系のゴットフリートではオリーブの木陰となっているのに対して、サトクリフでは梨の木の下となっているほかは、どの作品でもほぼ同じである。

サトクリフに従って、そのエピソードをまとめると、トリスタンとイズーのことを疑い始めたアンドレは、古代の秘術に通じている宮廷のこびとのもとに出かけて、相談をもちかけた。するとこびとは王妃とトリスタンが今も密会をしていることを知らせたので、アンドレはこのこびとを王のもとへ使わせた。こびとは国王に、遠狩りに出かけると触れを出しておいてから、こっそりと戻って来ることを進言した。国王が留守と知れば、王妃とトリスタンは梨の木の下で待ち合わせるだろうと言うのである。そこで王は七日間留守にすると触れを出して、狩りに出かけるふりをして、半日も進まないうちに戻って来て、こびとともに梨の木の上によじ登った。日が暮れて、そこへトリスタンがやって来て、合図の木の枝を小川に流すが、そのとき水面に二つの影が月の光に照らされて映っているのに気がついた。まもなくイズーが来るはずであるが、トリスタンはもはや彼女に急を告げる術（すべ）はなかった。合図を受けて、イズーは恋人に会うために勇んで馳せつけて来た。しかし、イズーはトリスタンがいつもと違って小川のほとりに身動きもしないですわっているのを見て、異変を察し、目を見上げると、木の枝の中に二人の人物の影が見えたので、すべてを悟った。そこでイズーはとっさに機転をきかせて、トリスタンになぜ自分を呼び出したのかと尋ねる。するとトリスタンもそれに応えて、噂にまどわされて理不尽な怒りを自分に向けている国王を説得して、自分が宮廷に戻れるよう、力を貸してほしいと頼むとともに、自分たちは兄妹のように振る舞ってきたので、人々の疑念をまくことになったのだと付け加えた。それに対してイズーは、「もし兄のような気持ちでおられるなら、ここを立ち去って、私がなんとか王の愛を取

り戻せるようにしてください」と頼む。するとトリスタンは打ちひしがれたようなふりをして、首を垂れた。イズーはくるりと背を向けて立ち去ったあと、トリスタンもその場をあとにした。ベルール系の民衆本やトマ系のゴットフリートでは、この二人が機転をきかせて国王を欺く場面がさらに詳しく展開されているが、大筋はほぼ同じであると言ってよいであろう。

この場面の様子を一部始終梨の木の上から見ていたマルク王は、短剣を抜いて、こびとの方に向き直ると、こびとは枝から飛び下りて森の中に逃げてしまう展開については、すべての作品に共通している。しかし、そのあとマルク王がトリスタンを呼び戻す場面では多少の相違が認められる。すなわち、ベルール系の民衆本ではマルク王は自分が木の上から二人の様子を窺っていたことを打ち明けて、トリストラントを呼び戻すことにするが、トマ系のゴットフリートでは打ち明けることなく、イゾルデの語っていることがマルケ王の聞いたとおりであったので、マルケ王は二人を信じて、トリスタンを呼び戻すのである。サトクリフはこの両者のうちで前者に従っていることが明らかである。

5. 妬む者たちの策略

こうしてトリスタンはまた再び王妃イズーのそばで暮らすことになるが、どの作品においてもトリスタンを妬む者は相変わらず二人の恋人たちの様子を窺い続ける。それによってついに二人は現場を捕らえられて、トリスタンは車裂きの刑に、王妃イズーは火炙りの刑に処せられることになるが、その現場を捕らえられる場面はサトクリフでは伝統的な伝承と比べると、かなりの改作が施されている。

まずベルール系の民衆本では、逃げ出していた侏儒（こびと）は司厨長ディナスに偶然森の中で見つけられて宮廷に呼び戻されていたが、トリストラントが国王の愛を独り占めしているのに再び憎悪の炎を掻き立てられたアウクトラート大公は、その侏儒を再度利用して、策略を国王に伝えさせる。その侏儒が今回考え出した策略は、国王がトリストラントを七晩ほど旅に出させるというものであった。そうするとトリストラントは旅立つ前の今宵にも王妃を訪れるであろうから、二人の間の三和台（たたき）に白い小麦粉をまき散らして、証拠をつかむとよいと言うのである。侏儒の助言どおりのことがなされ、夜になってトリスタンは王妃に暇乞いをしたいと思った。そのとき彼は小麦粉が撒かれていることに気づいたので、寝床から寝床に跳び移ろうとして一跳びに跳んだが、治りきっていない傷口が開いて、王妃にも自分にもその血がついてしまった。さらにそのあと自分の寝台へと跳び移る際にも、片足をついてしまい、粉の中に足跡を残してしまった。これによってマルク王は確かな証拠をつかみ、トリストラントは車裂きの

刑に、王妃を火刑に処すことを宣言したのである。

トマ系のゴットフリートにおいても、この場面は、多少の違いはあれ、ほぼベルール系の民衆本と同じであるが、しかし、この作品ではそのあとマルケ王は二人にそれぞれに処刑を言い渡すのではなく、イゾルデに熱鉄の裁きを要求しており、まったく異なった展開を見せている。それについてはあとで述べる。

これら二つの伝承に対してサトクリフでは、小麦粉を撒くエピソードは取り入れられておらず、ただ単にアンドレがあずまやでトリスタンの腕の中に抱かれているイズーを見つけて、それに怒りを示したマルク王が二人にそれぞれの処刑を言い渡すことになっている。サトクリフではかなりの部分が削除されて、スピーディな展開となっていることが理解できよう。

6. 恋人たちの処刑

このあとトリスタンとイズーが処刑されかける場面は、ベルール系とトマ系ではまったく異なった展開となっており、サトクリフは前者に従っている。

まずベルール系の民衆本では、二人の処刑のことを知った司厨長ディナスがマルク王に二人の助命を嘆願するが、それによってマルク王の怒りがますます火に油を注ぐように燃え上がるさまが語られている。ディナスによる助命の嘆願は受け入れられなかったが、刑場に向かうとき縛られていたトリストラントの両手は解かれたものの、それ以上のことは許されなかった。やがてトリストラントはある御堂の前までやって来たとき、祈りを捧げて、神に自分の罪を懺悔したいと言って、その御堂に立ち寄らせてほしいと願い出た。警護の一人は時間がないという理由で退けたが、もう一人が口を挟み、その御堂には扉が一つしかなく、しかも背後は海で、荒波が断崖に打ち寄せているので、逃れようもないと言って、許可することになった。トリストラントは御堂に入ると、神に祈りながら、窓によじ登って、そこからひと思いに海へ向かって跳び降りたところ、神に救われて、海を泳ぎ切って陸に上がり、そのまま逃げ去った。その途中でトリストラントはちょうど彼の身を案じてこちらに向かっていた忠実な家臣クルヴェナルと出会い、クルヴェナルは一刻も早くここから逃げ出そうと促したが、トリストラントは王妃イザルデを救わずして逃げるわけにはいかなかった。そこでトリストラントは王妃の裁きが行われる場所へ近づいて行った。そのうちにトリストラントが逃亡したことがマルク王に報告されると、マルク王は捜索を命じたが、空振りに終わったので、その怒りを妃イザルデに向けて、妃を火刑場へ引いて行くように命じた。その刑場へ向かっているとき、癩者の頭目が駆けつけて来て、妃を自分たちに渡せば、これ以上の極刑はないと

提案した。彼には百名を越える癩者の仲間がいるので、彼らは妃をわが物にしようと欲情を駆り立てるであろうから、妃はこの生き恥に到底耐えられないだろうと言うのである。マルク王もこれ以上残酷な仕置はないと思って、妃を癩者の頭目に渡してしまった。癩者の頭目は妃を騾馬に乗せて、刑場を立ち去って、トリストラントが潜んでいるところにさしかかった。そのときトリストラントはクルヴェナルとともに剣でもって癩者に切りつけて、王妃を救い出したのである。トリストラントは最愛の妃を抱き締め、二人は互いに抱擁を交わしたが、無駄な時間を費やしている暇はなかった。トリストラントと妃イザルデはクルヴェナルを伴って、その場をあとにして深い森の中へと逃げ込んだ。

これに対してトマ系のゴットフリートでは、マルケ王は二人に処刑を言い渡すのではなく、王妃イゾルデに熱鉄の裁きを要求することは、すでに上で述べたが、その熱鉄の裁きは六週間後にカルリウーンで行われることになった。そこでイゾルデは密かに考え出した策略をあらかじめトリスタンに手紙で知らせてから、裁きの当日、巡礼者姿のトリスタンに船から岸まで運んでもらうが、そのときトリスタンは倒れて王妃を抱く格好になった。そのことによってそのあと王妃イゾルデがマルケ王の前で口にする「あの巡礼者とあなたのほかには、私のそばに寝た者はいません」という言葉に嘘偽りはなくなる。こうしてイゾルデはこのときもマルケ王を巧みに欺き、無罪となって、難を逃れることができた。ゴットフリートではトマ系特有のあらすじが展開されていることが理解できよう。

これら二つの伝承のうちサトクリフは明らかにベルール系に従っており、多少の相違はあるものの、あらすじの大筋はそれとほぼ同じである。ただサトクリフではトリスタンとイズーが、現場を押さえられて裁判にかけられたとき、二人は自分たちの愛を否定すれば、互いにそれを価値なきものにおとしめるので、何の抗弁もしないことになっており、そこにサトクリフの特徴があると言ってもよいであろう。サトクリフでは二人は媚薬によって結ばれたのではなく、あくまでも自然に生まれた真実の愛によって結ばれたことが、それによって表現されているのである。しかし、それによってまた二人はそれぞれの刑に処せられることになるが、その後の展開は上述の民衆本とほぼ同じであるため割愛する。

7. 谷間あるいは森の中での生活

いずれにしてもトリスタンとイズーはクルヴェナルを伴って、ベルール系の民衆本では森の中へ、トマ系のゴットフリートでは森の中の「愛の洞窟」へ、そしてサトクリフでは谷間へと逃げ延びて、あとからそこにやって来た愛犬とともに二年近く一緒に暮ら

すことになるが、その谷間あるいは森の中での生活に関しても作品によってかなりの相違がある。

まずベルール系の民衆本では、こうしてトリストラントとイザルデはクルヴェナルと猟犬とともに森の奥深くに身を潜めて、鳥を射たり、川の魚を捕らえたりなどして暮らし、その生活はまことに貧窮の生活ではあったが、それでも二人にしてみれば、二人の愛がこの辛酸な一切を甘美で輝かしい日々に変えてくれるのであった。

このような生活を二年あまり続けた頃、彼らが暮らす森の中へ、偶然マルク王の森番がやって来たことから、二人の運命は変わることになる。その頃、トリストラントと妃は互いに愛撫を楽しんで眠りに陥るときには、抜き身の剣を二人の間に置くという習慣を身に付けていたが、マルク王の森番が彼らの小屋に辿り着いたときもそうであった。森番から報告を受けたマルク王がそこに出かけて、小屋の中で恋人たちの眠っている姿を見たとき、二人の間には抜き身の剣が置かれていた。王は仰天しながらも、二人の傍らへ忍び寄り、そっと手を差し伸べて、剣を取り上げると、その代わりに自分の剣を置いた。さらに王は妃の身体の上に自分の手袋を置いてから、宮廷へ帰って行った。トリストラントは目覚めたとき、王の手袋を見つけるとともに、剣がマルク王のものであることに気づくと、妃に向かって、マルク王がここに来たに違いないと言ってから、ただちにクルヴェナルに命じて馬を引いて来させて、その小屋を立ち去って行った。その後、三人はある開墾地に辿り着いて、その近くに住んでいたウグリムという名の隠者を訪れて懺悔を願い出た。しかし、トリストラントが王妃をマルク王のもとに返さぬ限りは、いかなる懺悔も聞き入れられないと断られた。

恋人たちはこうしてなおも森の中での生活を続けていたが、やがて二人があの秘薬を飲んでからちょうど四年目の日がやってきた。すると恋人たちにはたちまち森での惨めな生活がいかにも辛く感じられるようになった。もちろん一緒に過ごした四年間のうちに二人の心のうちには、秘薬によるのではない自然の愛が燃え上がっていて、互いに離れてはいられないという想いがあったことも確かであるが、しかし、これ以上この森にとどまることは耐え難く、生きる道を変えねばならないとも思い始めていたのである。

そこで二人はクルヴェナルを伴って隠者ウグリムを訪ねて、相談すると、隠者は恋人たちの気持ちが変わって、助言と慰めを求めてやって来たことを喜び、さっそくマルク王にあてて、トリストラントが妃をマルク王に返すつもりであるという内容の手紙を書いて、それを城へ届けさせた。それを読んだマルク王は、重臣らを呼び集めて評定を開いた結果、「妃は再び迎え入れるが、トリストラントはマルク王の国より永久に追放する」という返事をした。

こうして約束の日にトリストラントは妃を連れて出かけて、マルク王に妃を返した。その折り、トリストラントは以前と同じように自分をその宮廷に置いてほしいと願い出たが、それは叶えられなかった。彼は自分の罪の償いを妃に求めないようにと国王に頼んでから、後髪を引かれる想いでその場を立ち去って行った。要するに、この作品ではトリストラントが妃イザルデをマルク王のもとに返すきっかけとなったのは、秘薬の効く四年という期限が切れてしまったことであり、秘薬が重要な役割を果たしていることが理解できよう。

このベルール系の民衆本に対して、トマ系のゴットフリートでは愛の媚薬が取り入れられてはいるものの、それには期限が付けられていない。恋人たちが二人で森の中で生活し、窮乏ながら「愛の洞窟」での生活を楽しんでいるうち、マルケ王の猟人頭に見つけられ、その通告でマルク王が駆けつけてみると、二人の間には抜き身の剣が置かれていたため、マルケ王は陽光が王妃の美しい皮膚を損なわないように小窓を草や葉でふさいだのち、そのまま引き返すといった物語の展開は、細かな点で若干の相違はあれ、ベルール系とほぼ同じであるが、媚薬に期限が付けられていない点が大きな違いである。そのためゴットフリートでは隠者は登場しないし、トリスタンの懺悔も織り込まれていない。この作品では王妃イゾルデがマルケ王のもとに戻ることになるのは、マルケ王が二人の潔白を信じて顧問官や親戚の者たちと相談の結果、事情に通じているクルヴェナル（恋人たちは彼をひとまず宮廷に返し、自分たちはアイルランドへ行ったとマルケ王に伝えさせておいた）を使者として二人のもとに遣わせたからである。このクルヴェナルを通じてマルク王の意向を聞き知った二人は、それを心から喜ぶが、その場面でゴットフリートは「彼らが喜んだのは、他の何よりも神のため、はたまた自分たちの名誉のためであった」と語っている。「神」と自分たちの「名誉」のため、二人はこうして前に来た道を通って、また元の栄耀栄華の生活に帰って行ったが、しかし、マルケ王の嫉妬と猜疑は容易には消えなかった。ある暑い昼下がり、イゾルデが庭の木陰に寝床を用意させて、そこへトリスタンを呼び寄せたところを、マルケ王はついに発見し、それによってトリスタンはそこから追放されることになる。別れにあたってイゾルデは、トリスタンに指輪を贈ると、トリスタンはそこを立ち去り、各地で数々の武勲を立てながらも、イゾルデに会えないという悲嘆の日々を送り迎えるのである。

秘薬に期限が付けられているか否かの違いはあれ、作品の中に愛の媚薬が取り入れられているこれら二つの作品に対して、サトクリフはすでに述べたように秘薬のエピソードを削除している。そのために物語の展開にも大胆な改作が施されているのはもちろんのことであるが、細かな点でも説明を加えることによって、現代の読者に読みやすく、

かつ理解しやすくする努力をしていると言える。まずサトクリフの作品では、トリスタンとイズーがゴルヴナルと猟犬ブランを連れて辿り着いたのは小さな隠れた谷間であった。彼らは流れの脇に小屋を建てて、そこで暮らした。彼らは弓を作って、猟犬ブランを使って狩りをしたり、鱒を釣ったりして、なんとか暮らしていた。どこかケルト的な雰囲気を漂わせるそのような生活を三年続けてきて、また秋がめぐってきたある日の夕方のことである。ゴルヴナルが猟犬ブランとともに狩猟の一人旅に出かけて、トリスタンとイズーが二人きりで小川を眺めていたとき、イズーはふいに恐れを感じたように思い、トリスタンに「私たちの上に影が落ちてきた」と口にするのである。イズーの心の中には何らかの変化が現れ始めていたのであり、その心境に決定的な変化をもたらすのは、マルク王が狩りのためその近くにやって来たことである。トリスタンとイズーはその日の狩りの物音をまったく耳にしていなかったが、夕方になって何かの物音に気づいた。はぐれた犬のようにも聞こえ、あるいは狼かもしれないと思って、耳を澄ませたが、声は二度と聞こえなかった。しかし、その何かの物音のためにトリスタンは、そのあと小屋に入って寝台に横になったとき、狼が近くにいるときにいつもするように、抜き身の剣を自分の傍らに横たえておいたのである。従来の伝承ではその抜き身の剣を二人の間に置くことに関しては何の説明もないか、あるいはあったとしてもただ単に「ケルトの習慣にならって」とされているに過ぎないのに対して、サトクリフでは読者にも納得のいく理由を付け加えている。

そのことはそのあと展開されるマルク王の剣と手袋のエピソードについてもあてはまる。すなわち、狩人の長から知らせを受けたマルク王は、その小屋に辿り着いて中を覗き込んで見ると、トリスタンとイズーが寝床に横たわっているのを目にした。マルク王はまずトリスタンに、次に王妃に剣を振るえばよいだけであったが、相手の無力さのゆえにそれができなかった。しばらく見つめているうちに、イズーがこれほど美しかったことはないように思われ、またこれほど彼女を恋しく思ったこともないような気がしてきたうえ、さらにはトリスタンに対しては甥への昔の愛情がなつかしく思われて、トリスタンの剣を取り上げ、その代わりに自分の剣を置き、イズーの胸の上には狩猟手袋の片手を置いてから、その場を立ち去ったが、サトクリフはその意味をのちに主人公たちの口を通して明らかにしている。すなわち、目覚めた二人は、剣と手袋を見て、マルク王がここにやって来たことを悟って、まずはそこから逃げ出すことを考えるが、王が自分たちを殺そうと思えば殺せたのに、それをせずに、剣と手袋を残して行ったのには何らかの意味が込められているのだと思った。そこでイズーが思い出したのは、かつてマルク王がイズーの手を包んで、「冷たい手だが、わしの手は大きいから暖めてやれよ

う」と言った言葉である。トリスタンもマルク王の残して行った剣に関して、「私も王の足元に身を投げ出してみましょう。それが剣の意味でしょう」と解釈した。従来の伝承では何の説明もなく作品の中に取り入れられていたマルク王の剣と手袋のモチーフに対して、サトクリフは明確な、読者に納得のいくような説明を加えていることが容易に理解できよう。

こうして確かにイズーはコーンウォールの王妃に戻りたくはなかったが、しかし、犬の吠え声に追われて過ごすよりはコーンウォールの王妃である方がましでしょうと、トリスタンに説き伏せられているうちに、ゴルヴナルも戻って来て、その従者もそろそろティンタジェルに戻る時期だと同意したので、イズーはトリスタンとともにマルク王のもとに帰って行ったのである。しかし、マルク王は王妃イズーを迎え入れたが、トリスタンには三日間のうちにティンタジェルから出て行くようにと命じた。そこでトリスタンはイズーのもとに猟犬ブランを残し、またイズーは黄金の指輪をトリスタンに贈ったのち、ゴルヴナルとともにティンタジェルを出て行ったのである。

第五章　白い手のイズー

1. カルレー城訪問

さて、王妃イズーをマルク王のもとに返して、ティンタジェルから追放の身となったトリスタンは、その後、ゴルヴナルを伴ってどのような旅を続けたのであろうか。その後におけるトリスタンの旅については、作品によってさまざまなエピソードとして語られており、トリスタン伝説の最後に位置するいわゆる「白い手のイズー」にまつわる物語は、作品ごとに独自の展開を見せていると言ってもよいであろう。

まずベルール系の民衆本では、トリストラントはアルトゥス王の宮廷を訪れて、宮廷騎士バルボンとよき友になったのち、騎士デレコールス・イセナリールと闘うエピソードや、アルトゥス王がティンタリオル近郊で狩りを催した際に宿泊したマルク王の居城での独特なエピソードが最初に語られてから、ようやくトリストラントはカルエー（ノルマンディ西部あるいはブルターニュ）[33] へ赴くことになっている。その国は荒れ果て、多くの村と町も廃（さび）れていた。トリストラントが宿を求めたミヒャエルという司祭から事情を聞いたところによると、ハウバリン王の家来であるマンティスのリオル伯は、王の娘を嫁にもらえないと分かると、部下を扇動して反旗を翻して、その城を囲ん

---

33)小竹澄栄訳: 前掲書 338-9 頁参照。

で兵糧攻めを続けており、今となってはハウバリン王には息子カイニスのほかには味方はいないという。このような事情を聞き知ったトリストラントは、翌朝、ハウバリン王の城へ行き、奉公したい旨を申し出ると、王は最初は食糧不足などを理由に断っていたが、やがて援助者の心根の善良さを悟って、彼を城の中に招じ入れた。トリストラントは王と息子カイニスたちから丁重に迎えられ、カイニスの妹にも引き合わされた。妹の名はイザルデといったが、トリストラントは王妃イザルデのことを思い出し、そこのイザルデには心を動かされなかった。夜明けとともに、トリストラントはリオル伯の敵陣へ向かって馬を馳せ、やがてリオル伯を捕虜として城に戻って来た。リオル伯は地下牢に入れられる代わりに、六ヶ月以上の食糧を差し出すように命ぜられた。この顛末を聞いたリオル伯の部下たちは、主君の解放を求めて攻撃をしかけてきたが、トリストラントとカイニスの目立った働きにより、激戦の末、ハウバリン王側が勝利を収めた。感謝されてトリストラントは、その後もなおしばらく王のもとにとどまり続けていたが、カイニスはトリストラントがいつか不意に立ち去ってしまうのではないかと考えて、父王と相談の結果、妹イザルデをトリストラントに嫁がせたのである。

これに対してトマ系のゴットフリートでは、追放の身となったトリスタンは、ノルマンディーからドイツへ向かい、数々の武勲を立てながらも、王妃イゾルデに会えずに悲嘆の日々を送っていたが、その後再びノルマンディーに戻り、そこから故郷パルメニーエに戻って来た。かつて世話になったルーアルもフロレーテもすでに亡き人となっていて、トリストラントはその息子たちのもとにとどまった。そこでトリストラントは、ブルターニュとイングランドの間にある大公国アルンデール（民衆本ではカルエー）で戦争が行われていることを聞き知って、その大公ヨヴェリーン（民衆本ではハウバリン王）のもとを訪れた。トリスタンは戦うことで自分の心痛を少しでも忘れたいと考えたのである。大公ヨヴェリーン夫妻の間にはカーエディーンという息子と白い手のイズー（民衆本ではイザルデ）と呼ばれる娘があった。トリスタンはカーエディーンと友情を結び、ともに敵と戦い、ルーアルの息子たちの援助もあって、ついに勝利を収め、そこにとどまることになった。白い手のイゾルデはかつての恋人と同名のため彼の心をとらえたが、一人になると、トリスタンは自分の不実を責めた。こうして昔の恋と現在の恋が入り交じって、トリスタンは悩むのであるが、残念ながらゴットフリートの作品は主人公がこの二つの恋に悩んでいるところで中断している。

しかし、幸いにもゴットフリートが手本としたトマの作品では、この最終場面が残されている。そこではトリスタンが二つの恋によって思い悩むさまが詳しく展開されており、そこにトマの特徴がある。こうしてトリスタンは昔の恋と今の恋に苦しめられて、

悩みに悩んだのち、ついに白い手のイズーと結婚することを決意するのである。

これらベルール系とトマ系の伝承に対して、サトクリフではカルレー（民衆本ではカルエー、ゴットフリートではアルンデール）へ赴く前には、何のエピソードもなく、直接白い手のイズーのいる国での物語となっている。トリスタンがゴルヴナルとともにブリテン全土を、また諸国をさまよいながら、数々の冒険をして、そのブリタニーの地に辿り着くことは、わずか二行で済まされているのである。サトクリフはトリスタン物語を簡略化していることが窺い知れよう。トリスタンがそのブリタニーの荒れ果てた国カルレーに辿り着いて、そこの国王に援助して勝利をもたらすことになるのは、多少の相違はあれ、ベルール系の民衆本とほぼ同じである。ただその国王の名前はヘル王となっていて、その娘に求婚していた伯爵はジョヴラン、また国王の息子はカエルダンという名前に変更されている。さらにサトクリフでは、息子カイニスがその国に引き止めるために妹をトリストラントに嫁がせたベルール系とは異なって、その戦いの勝利の宴の席でヘル王自らがトリスタンに直接娘を嫁として差し上げたいと申し出ることになっている。トリスタンはイズー姫が両手に大杯を捧げて自分の前に立っているのを見て、その顔から姫の心が自分にあるのを知った。そこでトリスタンは、「かつての王妃イズーには二度と会うことは叶わない。今ここにもう一人のイズーがいるが、私が断れば、彼女は面目を失うことになり、私が彼女を娶れば二人とも幸福になれる」と考えて、大杯を支えるイズー姫の手に自分の手を重ねて、それを飲み、姫を娶ることにしたのである。トマ系に見られるようなトリスタンの苦悩の表現はなるだけ削除され、淡々とスピーディに物語が展開されているところにサトクリフの特徴があると言えよう。

2. 白い手のイズーとの結婚生活

こうしていずれの伝承においても、結婚までの苦悩の描かれ方には多少の相違はあれ、トリスタンは最終的には白い手のイズーと結婚するが、その婚礼の日の新床でのエピソードが語られているのはトマ系だけである。トマ系の原本によると、トリスタンは新床に入ろうとしたとき、金髪のイゾルデからもらった指輪が転がり落ちて、自分の誓った言葉を思い出し、新妻を名前のみの妻にしておくのである。トマ系ではトリスタンの悩みが特徴であることがこのエピソードからも確認されよう。しかし、トリスタンは白い手のイゾルデと結婚して、丸一年間ともに暮らしても妻の身体に触らなかったのは、ベルール系においても、またサトクリフにおいても、結局のところはトマ系と同じである。その場面に関してはベルール系とサトクリフでは、新床のエピソードがない代わりに、それぞれ独自のエピソードを織り込んであらすじを展開させている。

まずベルール系の民衆本では、ケルト伝説の『ディアミッドとグライーネの駈落ち』からトリスタン伝説に取り入れられたと推定される「大胆な水飛沫（みずしぶき）」のモチーフを用いてその場面を展開させている。それによると、カルエーの国王と王妃、トリストラントと妻イザルデ、それにカイニスの五人で遠乗りに出かけた折りのこと、イザルデの馬が水たまりに踏み込んで、水が彼女の肌着の下まで跳ね上がったとき、彼女は何の気もなく、「水よ、なんと大胆なこと、騎士様の手すら未だに届いていない、私の着物の下にまで飛び込む勇気があるとは」と独り言をつぶやいた。その言葉をカイニスが聞き取り、事情を問い質（ただ）したところ、彼はトリストラントが妹と夫婦の契りをまだ結んでいないことを知った。そのことは自分たちが辱められたことも同然だと考えて、カイニスは自分たちの盟友も終りだと、トリストラントを責め立てた。するとトリストラントは、貴い王妃がカイニスの妹よりも何倍もの愛をかけて自分の一匹の犬に優しく丁重に仕えていることを打ち明けた。そこでトリストラントは再び妻のもとに戻って来ることを誓った上で、その言葉に偽りなきを確かめるために、カイニスを伴ってクルネヴァルの国へ出かけて行くこととなり、物語は次のクルネヴァル再訪のエピソードへと繋がっていくのである。

これに対してサトクリフでは、「大胆な水飛沫」のモチーフを用いずに、カエルダンは妹を深く愛していたので、妹と夫との間がどのようであるかを悟っており、トリスタンにひとこと言わねばならぬと思っていたとしている。いかにも現代の読者を念頭に置いた展開である。そこでカエルダンは、ある日、トリスタンとともに海岸へ馬を駆ったとき、彼が海の彼方のコーンウォールに目を向けているのをとらえて、もう一人別のイズーのことを聞き出すのである。そのときトリスタンは、「もう一度彼女に会わなければ、私は死ぬか、気が狂うかしてしまいそうだ」と言ってから、「彼女を見さえすれば、心が軽くなって、白き手のイズーのもとに戻れるかもしれない」とも付け加えた。さらに続けて「どう言えば、分かってもらえるだろうか」とトリスタンが言えば、カエルダンは自分にも心に想う女性がいるので、その気持ちはよく分かると答え、トリスタンに請われて、今度はカエルダンがその女性のことを語り始めるのである。

彼の語るところによると、その女性はガージョレインといって、何度も会い、密かに結婚の約束までしていたが、彼が父の国境のいざこざで呼び出されたあと帰って来たら、彼女はベドニスの族長と無理やり結婚させられていたという。しかもその族長は昨年のカルレー包囲軍にも加わっていた人物で、さらに嫉妬深い男なので、毎日狩りに出かけるときには妻を城の高い塔の中に閉じ込めておくともいう。カエルダンはこれまで二度も彼女が胸壁に立っているのを見たと付け加えた。

この話を聞いたトリスタンは、カエルダンのその女性への想いに免じて、自分ももう一度コーンウォールへ行くことができるよう計らってくれまいかと頼んだ。トリスタンは必ず戻って来ることを誓ったので、カエルダンもマルク王のところでよい馬を調達するという名目で、一緒に行くことにしたのである。

3. 野営地での再会

こうしてトリスタンは、トマ系は例外として、カエルダンとともにコーンウォールへと出かけて、王妃イズーとの再会を果たすのであるが、この再会の場面でもサトクリフは、ベルール系の副次的なエピソードを削除しながら、あらすじの展開を簡略化していると言える。

まずベルール系の民衆本では、トリストラントとカイニスはリタニイの近くで船を降りてディナス公を訪れ、王妃への使者の役目を果たしてくれるよう頼んだ。ディナス公はそれを快く引き受けて、妃の贈り物であった指輪をトリストラントより受け取って、王妃のもとに出かけた。王妃はマルク王と将棋をさしていたが、使者の指に指輪を認めるや否や、将棋をやめて、彼を連れて自室に退いた。ディナス公は妃に指輪を渡して、トリストラントの願いを伝えると、王妃はすぐさまマルク王の前にまかり出て、騎士らを集めて白木が原へ狩りに出かけることを願い出た。この提案をマルク王も喜んで、さっそく翌日、狩りが行われることになった。トリストラントとカイニスは、王妃に伝えていたとおり、荊の茂みに潜んで、王妃ら一行がそこを通りかかるのを待ち受けた。この作品ではそこを通りかかる婦人たちが一人ずつ詳細に紹介されており、やがて王妃が通りかかると、カイニスはその美しさに驚くほどであった。トリストラントは小枝を妃の馬に命中させて、合図を送った。すると王妃は若きカイラック伯を呼び寄せて、自分は道すがら具合が悪くなったので、今宵は王の側で過ごすことができない、十分休息できるように、王の天幕は川向こうに、自分の天幕はこちら側に設けてくれるよう、王に伝えさせた。こうして夜になると、トリストラントは王妃の天幕を訪れて、王妃との密かな再会を果たしたのである。その間、カイニスは王妃から差し出された二人の侍女ギメルとブランゲルのうち、前者を選んで一緒に寝床につくが、この作品では「不思議な枕」のエピソードが展開されており、カイニスはその不思議な枕を頭の下に置くや否や、すぐさま眠りに落ちて、その夜は一度も目覚めないままであった。朝になると、トリストラントと王妃は悲しみと嘆きに張り裂けそうな胸をかかえて、別れを告げたのである。

サトクリフにおいても、この再会の場面は、細かな違いはあれ、大筋において上記のベルール系の民衆本とほぼ同じであるが、トリスタンの潜むサンザシの茂みを王妃ら一

行が通りかかる場面における一人一人の婦人たちの紹介は削除され、またカイニス（カエルダン）の「不思議な枕」のエピソードも削除されている。作者の関心がトリスタンとイズーの再会にあることが容易に理解できよう。さらにサトクリフでは翌朝の別れの場面が詳細に書かれており、そこで王妃がトリスタンにかつての誓いを思い出させると、彼は「あなたの名前にかけて頼まれたことは必ず行う」と約束して、帰って行くのである。

4. 王妃イズーの怒り

この誓いをトリスタンが破ったという知らせを受けて王妃イズーが怒りを表すのが、次のエピソードである。このエピソードはトマ系には織り込まれていないが、ベルール系の民衆本とサトクリフでは展開されていて、その場面に登場する人物名や細かな出来事において若干の相違が認められるものの、大筋はほぼ同じである。

サトクリフに従って、その後の展開を辿ると、王妃イズーのもとを去ったトリスタンは、そのままコーンウォールへ帰るため、ゴルヴナルとカエルダンの鎧持ちに指定の場所へ馬を連れて来るようにと命じていた。ところが、その二人はその途中でマルク王の家臣ベリに姿を見られてしまった。二人のうち一人はゴルヴナルだったので、ベリはもう一人をトリスタンだと思って、二人に呼びかけた。すると二人は追いつかれてはまずいことになると思って、急いで逃げ出した。そこでベリは「イズー王妃の名において、止まれ。もし今も王妃を愛しているのなら」と呼びかけた。しかし、二人は逃げ去って、大回りをして指定された場所に着いた。二人からその呼びかけの話を聞いたトリスタンは、イズーとの約束を思い出して、犬のように吠えたい気分であった。

一方、ベリは王妃と二人きりになる機会が訪れると、「王妃の名において」の呼びかけにもかかわらずトリスタンがそのまま逃げたことを報告した。するとイズーの中で怒りが燃え上がった。「トリスタンは自分を裏切った。今トリスタンの心をとらえているのは、白き手のイズーだ。」王妃イズーはこのように思い、ペレニスを呼び寄せて、トリスタンのあとを追わせて、怒りのほどをトリスタンに伝えさせた。それを聞いたトリスタンは、「ベリが見たのは自分ではなく、鎧持ちだ」という返事を言付けたが、王妃はそれを信じないどころか、ペレニスは賄賂（わいろ）をもらってそのような報告をするのだろうと、ペレニスを責めた。「私はペレニスほど簡単には騙されはしないと、戻って伝えるがよい」と言う王妃に対して、ペレニスは「もっとお優しい言葉はないものでしょうか」と頼むが、王妃は「私は裏切り者に容赦はしない」と答える。ペレニスは再度トリスタンのもとに引き返して、王妃の怒りの言葉を伝えると、トリスタンは組ん

だ腕に頭を落としてうめいた。

トリスタンはこのままではブリタニーには戻れないので、ゴルヴナルらを説き伏せて、レプラ病みの姿に身をやつして王妃イズーのもとに出かけた。王妃は狩猟から帰る途中であったが、トリスタンは王妃の前に進み出て、「王妃にこの顔を見てもらえれば自分の病が治るという夢を見た」と叫んだ。侍女ブランジャンはそれを止めさせようとしたが、王妃は「ささやかな願いではないか」と言って、レプラ病みの顔を覗き込むと、彼女の目は大きくなり、表情が変わった。トリスタンだと分かって、彼女はなおも長い間彼を見つめていたが、しかし、最後には冷たい声で、「さあ、見てあげたから、行きなさい！」と言った。トリスタンはなおしばらく見つめてほしいと頼んだが、王妃は家来や勢子たちにレプラ病みを追い払うよう命じた。家来たちは彼に向かって石を投げつけたが、彼に聞こえたものは、イズーの甲高い残忍な笑い声だった。トリスタンは三人のところに引き返し、ブリタニーへと帰って行った。

5. 王妃イズーの後悔

ここまでの展開では、サトクリフは民衆本とほぼ同じであるが、そのあと王妃イズーが後悔することに関しては両者間に著しい相違が見られる。

まずベルール系の民衆本から見ていこう。トリストラントが王妃イザルデから「笑い声」を浴びせられてひどい仕打ちを受けたことを知ったクルヴェナルは、王妃に対して怒りと憎悪を覚えて、トリストラントに一年間は妃に会わないようにと誓わせてから、そのあとで彼らはカルエーに戻っている。トリストラントはその国の人々から温かく迎えられ、以前にも増して奥方に親しみ、優しい好意をもかけるようになって、あの王妃のことはすっかり忘れていた。ところが、王妃の方はトリストラントを侮辱したことを後悔して、深い悲嘆に沈み込んでいた。そこで王妃はピロイスという名の若者をカルエーへ遣わせて、償いの言葉を伝えさせた。トリストラントは「お目にかかれば、また追い払われるやもしれぬ」と言って、断っていたが、王妃が心底後悔していることを悟ると、「ほんのわずかばかりお恨み申したに過ぎない。今となっては水に流すことにしよう」と答えた。ただ自分は一年間、王妃を避け、会わないという誓いを立てたので、次の五月でちょうど丸一年になれば、王妃のもとを訪れようと約束した。こうして五月になると、約束どおり、トリストラントは巡礼の衣を身に纏い、クルヴェナルを伴ってクルネヴァルの国へと旅立って、再びディナスのとりなしによって王妃イザルデに会うのである。朝になって、トリストラントは別れを告げて、王妃のもとを立ち去るが、その途中で一人の騎士から「王妃の御名にかけてお願いする」と呼びかけられて、要求どお

り、遥か彼方の的を射ぬき、かなりの距離の掘り割りを一跳びで跳び越え、想像もつかぬほど彼方へ石を投げてから、誰にも気づかれないように逃げ去った。夕方になって、国王がその巡礼の見事な技量の話を聞くと、それはトリストラントに違いないと考えて、彼を捜し出すようにと命じたが、トリストラントはすでにカルエーへと駒を進めていた。その国に着くや、トリストラントは皆から歓び迎えられた。

その後、トリストラントの父が他界し、故国が大混乱に陥っているという知らせが届いて、故国に帰ろうとするが、しかし、トリストラントはあの妃イザルデに会えぬまま出発することなど到底耐え難いと思って、またもや王妃イザルデを訪ねることになっている。そのときは旅芸人か旅の楽師のように装って、またもやディナスの世話で、夜に果樹園の菩提樹のもとで王妃と会い、抱擁を交わしてから、その場を立ち去った。ところが、その際、アウクトラートに姿を見つけられて、追跡されたが、ディナスと王妃のとりなしによってその追跡から逃れることができた。

トリストラントはそれから故国に帰ると、大混乱を収めて、二年以上の時を過ごしたのち、クルヴェナルに故国の世話を委ねてから、カルエーへ帰って行った。その間に舅と姑はすでに世を去り、カイニスは戦乱の只中に巻き込まれていた。あのリオル伯が再び勢力を取り戻して、暴虐の限りを尽くしていたのである。トリストラントはリオル伯を打ち負かすものの、その戦いで弩（いしゆみ）の石が命中して気を失い倒れてしまった。トリストラントは丸一年以上も快方に向かわぬまま、病の身を横たえていたが、ようやく馬に乗れるようになって浜辺に通りかかり海を目にしたとき、王妃イザルデに会いたくなった。こうして彼は今度は道化の衣と頭巾を被って、またもや旅立ち、国王の目を欺いて、王妃との再会を果たして戻って来るのである。

このようにベルール系の民衆本ではトリストラントは野営地で再会を果たして以降、王妃との逢引きをこれまで四度にまでわたって繰り返すのであるが、これに対してサトクリフではそれら四タイプの装い（レプラ病み、巡礼者、旅芸人、道化）で王妃を訪れるエピソードは削除されている。トリスタンにひどい仕打ちを加えた王妃イズーは、トリスタンに会えないまま何ヶ月か経つうち、あのように冷くトリスタンを追い払ったことを後悔し、トリスタンの言葉はまことだったのかもしれないと思い始め、彼がまた指輪を誰かに託して届けてくれるのではないかと期待して待っていたが、そのような者は現れなかったのである。このようにサトクリフは数々の素材に語り継がれてきたエピソードをできるだけ削除して、あらすじの展開をスピーディにしているのであり、そこにサトクリフの特徴があると言ってもよいであろう。

6. カエルダンの恋人

こうしてトリスタンはこれまでの冒険では傷を負いながらも致命傷を受けずに済んだのであったが、ベルール系の民衆本ではそのあとに展開されるカイニス（サトクリフではカエルダン）の恋人のエピソードにおいて決定的な致命傷を受けることになるのであり、サトクリフもそれに従っている。しかし、ベルール系の民衆本とサトクリフの間ではそのエピソードの挿入場所に関して若干の相違が見られる。

まずベルール系の民衆本では、このカイニスの恋人が初めて紹介されるのは、トリストラントが巡礼の装いで王妃と最初の逢瀬を果たして戻って来てからのことである。そこで語られているところによると、カルエーからそれほど遠くない国にナムペセニスという国王がいて、彼には世に麗しいカルデロイデという奥方があったが、彼はこの奥方に心底ほれ込むあまり、夜となく昼となく奥方を見張っていたという。この奥方は国王に嫁ぐ以前にはカイニスと結婚する誓いを立てていた女性であり、国王は彼らの誓いに気づいてもいたので、見張りを厳しくしていたのである。そのためカイニスはトリストラントに奥方のもとへ忍び込める知恵はないものかと相談を持ちかけた。するとトリストラントは、恋人に鍵の型を蜜臘にとってもらい、それを濠割り越しに投げてもらって、それで合鍵を作ることを提案した。さっそくそのような計略を進めているときに、トリストラントの父の訃報が届き、トリストラントは帰国の準備を始めるが、このまま王妃に会わずして帰国することなどできないと言って、すでに述べたように、その前にまたもや旅芸人の装いで王妃イザルデのもとに出かけて行くのである。

その後、この奥方のエピソードが二度目に紹介されるのは、トリストラントが道化の装いで出かけて王妃との逢瀬を果たして帰国したあと、またカルエーに戻って来てからのことである。カイニスはトリストラントの留守中にはうまく事を運ぶことができず、トリストラントが戻って来てから、ナムペセニスが狩りに出かけたと知るや、彼とともにガルデロイデのもとへ出かけるのである。城に着くと、合鍵でもって門を開けて入って行ったが、濠に架かる橋にさしかかったとき、カイニスは帽子を吹き飛ばしてしまった。二人が城に入って行くと、カイニスは奥方との逢瀬を果たした。その間、トリストラントは退屈しのぎに玩具の矢を壁に射かけて戯れていたが、矢は壁に刺さったまま、放置されてしまった。カイニスが恋人と望みどおりの恵みを授けられると、やがて別れを告げて、カイニスとトリストラントはそこを立ち去った。やがてナムペセニスは城に戻って、橋を通りかけたとき、濠に帽子が浮かんでいるのを見つけ、大いに怪しんだ。さらに城内に入って、貴婦人部屋の壁に矢が刺さっているのを見つけ、このような矢遊びができる者はトリストラント以外にはいないことを知っていたので、ナムペセニスは

カイニスが忍んで来たことを悟って、奥方を問い詰めた。奥方の話を聞いたナムペセニスは、怒りをあらわにして、百名の手勢を引き連れて二人のあとを追いかけ、憎悪に燃えて二人に攻撃をしかけた。彼はついにカイニスを切り殺したが、それでもカイニスは息を引き取るまでに三十人ばかりの敵を討ち果たした。トリストラントも勇敢に応戦し、残る七十名を傷つけ殺したものの、自らも手ひどい深手を負った。ナムペセニスはトリストラント目がけて突進し、毒を塗った槍で突き刺すと、トリストラントは死んだように倒れ伏したのであった。二人の勇士はカルエーに運ばれ、カイニスは丁重に葬られ、トリストラントの傷の手当てのためには何人もの医者が呼び寄せられたが、何の役にも立たず、手の施しようもないままであった。このように民衆本ではトリストラントが致命傷を負うまでには数々のエピソードが織り込まれているのである。

これに対してサトクリフでは、カエルダンに恋人ガージョレインがいることはトリスタンが王妃イズーに会いたい気持ちを伝える場面ですでに語られているが、実際にカエルダンが彼女に会いに出かけるのは、トリスタンが父の死後、またカルエーに戻って来てからとなっている。そのときにはヘル王はすでに亡き人で、カエルダンが国王となっていた。そこでトリスタンは彼に妻を娶ることを勧めたところ、彼の心をとらえていたのは今なおガージョレインだったので、その夫ベドニスが留守のすきをねらって、合鍵を携えてトリスタンとともに彼女に会いに出かけたのである。その彼女の城での展開は、カエルダンの帽子が花輪になっていることと、トリスタンの矢の遊びがイグサの茎の遊びになっているという相違はあるものの、その他では民衆本とほぼ同じである。そのあとサトクリフでもトリスタンとカエルダンは追いかけて来た二十名の敵を相手に戦うが、カエルダンは殺され、トリスタンも敵に剣を突き刺されて、意識を失ってしまう。ちなみに、サトクリフではベドニスは生き残った数人と家路につくことになっている。カエルダンとトリスタンはカルレーに運ばれ、カエルダンは丁重に葬られ、トリスタンは傷の手当てを受けたが、その甲斐もなく、日毎に衰えていくのであった。このようにサトクリフでは複雑に絡み合っていたエピソードを簡略化して、物語の展開をスピーディにしていることが容易に理解できよう。

なお、トマ系の作品ではトリスタンが致命傷を負うのは、トリスタンが白い手のイズーと結婚して直後、狩猟中に小トリスタンと出会って、その彼を援助するために七人の敵と戦っているときに、毒槍で深手を負うことになっている。そこで日々衰えていくばかりのトリスタンは、カーエディーンに初めて王妃イゾルデのことを打ち明けるのであり、そこでは「大胆な水」のエピソードもなければ、コーンウォール再訪と王妃イゾルデの怒りのエピソード、さらにはカーエディーンの恋人のエピソードも取り入れられて

いない。トマ系では物語は一気に最後の「黒い帆」のエピソードーへと進むのである。

7. 黒い帆

いずれにしてもトリスタンは戦いにおいて致命傷を負い、日毎に衰えていくばかりで、コーンウォールの王妃イゾルデなら傷を治せると思って、彼女のもとに使者を送ることになるが、その使者はトマ系では戦いで死ぬことのないカーエディーンとなっているのに対して、ベルール系の民衆本では一人の男、サトクリフではブリュンという名の鎧持ちとなっている。その際トリスタンは使者に「王妃が一緒なら白い帆、一緒でなければ黒い帆を掲げるように」という指示を出すが、その指示を白い手のイズーが聞き知るのも、作品によって異なっている。すなわち、トマ系では白い手のイズーがトリスタンとカーエディーンの会話を立ち聞きすることになっておれば、ベルール系では白い手のイザルデが使者の娘から聞き出すことになっているが、これらに対してサトクリフではのちに船がこちらに向かっているときに、トリスタンが病に浮かされた夢の中でうなされているのを白い手のイズーが聞くことになっている。

使者からトリスタンの容体を聞いた王妃イゾルデが船で彼のもとに向かう場面に関しては、トマ系ではその船の上でのことが詳しく展開されているのに対して、ベルール系とサトクリフではまったく述べられていない。トマ系ではその特徴にふさわしくイゾルデの内面が詳しく展開されているのであり、ベルール系とサトクリフではあらすじを淡々と物語るところに特徴があると言えよう。

そのあとの最終場面における展開にも作品によって多少の相違が見られる。まずトマ系ではトリスタンは病床に横たわって、昼となく夜となく、ため息をついて待ち焦がれていた。彼が念願する唯一のものはイゾルデであり、破滅は刻々と近づいてきたが、あこがれが彼を死なせなかった。彼は船を見に絶えず使いの者を海岸へやり、しまいには寝台ごと自分を海岸へ運ばせて、白い帆が見えはせぬかと、沖の方を探ることもしばしばであった。しかし、もし黒い帆だったら、と考えて、彼はゾッとした。そんなものを自分の目で見たくはなかったので、自分をまた部屋へ連れ戻させた。このように苦しんでいるところへ、妻のイゾルデが入って来て、船が近づいていると言う。「帆の色は？」と尋ねるトリスタンに、白い手のイゾルデは「帆は真っ黒です」と答える。これを聞いたトリスタンは悲嘆に打ちのめされて、「イゾルデよ、私はそなたに見捨てられて、今ここで死ぬ。私のただ一つの慰めは、私の死がそなたの反目する心を和らげて、そなたが私の生きている間は拒んだものを死者に与えることだ」と言い残して、息を引き取るのである。一方、王妃イゾルデの方は、海上で風も吹き始めて、白い帆は滑るように進

み、ついに到着したが、上陸すると、教会や礼拝堂から死者を悼む鐘の音が鳴り響き、やがてトリスタンが亡くなったことを耳にする。彼女は髪を乱して、死者のいる王宮へと急ぎ、ろうそくの光に照らされて横たわっているトリスタンの顔を長い間見つめていたが、ため息もつかず、泣きもしなかった。彼をしっかりと腕に抱きかかえ、やさしく口と頬に口づけした。すると意識がなくなって、彼女は嘆きもせずに、ことときれた。要するに、トマ系ではトリスタンはイゾルデへのあこがれのために死に、イゾルデは救助に間に合わなかった傷心のために死んだのであり、トリスタンは愛のために、イゾルデは愛の悲しみのために死んだのである。トマ系ではこの場面で終っている。

ベルール系の民衆本においても、最終場面の大筋はほぼトマ系と同じであり、トリストラントは「黒い帆」の報告を聞いた途端に、たとえようもない衝撃に打たれて死んでしまうが、そのときまず船が戻って来たのを最初に目にするのは使者の娘となっている。そしてその娘は「白い帆」を掲げて父が戻って来たことを奥方に伝えるが、奥方は船の帆の色を尋ねるトリストラントに「黒い帆」と答える。この作品では奥方の心が千々に乱れ、血を吐くような嘆き声を上げたことも記されている。このトリストラントの死のために都中が限りない嘆きに打ち沈んでいるところに、王妃イゾルデは到着する。都中の嘆き声を耳にして、王妃は何が起こったのかを悟った。王妃はトリストラントの遺骸が横たえられている棺台に歩み寄ると、その傍らに嘆きながら佇んでいた白い手のイズーに向かって、「そこをお退き遊ばして、私をお側近くに寄らせてください。あなたより私の方がこの方のために涙を流す資格があるのです。あなたには到底及びもつかないほど、私はこの方をお慕い申し上げていたのです」と言って、棺台を開け、その側に身を横たえる。すると瞬く間に王妃の魂は天翔けたのである。そのさまを目にした奥方は、「黒い帆」という一言がこのような結果をもたらしたことを悟り、耐え難い後悔に打ちのめされて、悲嘆の奈落へ突き落とされた。さらにこのあとマルク王は悲報を聞いて駆けつけて、二人の間に燃え上がった恋の焔は秘薬の力によるものであることを初めて聞かされ、自らがこれまで二人にとった行動を後悔する。そこでマルク王は二人の亡骸を伴って故国に帰ると、二人を手厚く葬り、トリストラントの遺骸の上には葡萄の樹を、イザルデの遺骸の上には薔薇の樹を植えさせたところ、二本の樹の蔓は互いに絡み合って生い茂ってゆき、なんとしても引き離せなかったという。これぞ愛の秘薬のなせる業（わざ）と、人々は噂し合ったと語ったところで、民衆本は終わっている。

サトクリフにおける最終場面も、大筋ではこれら二つの伝承とほぼ同じであるが、どちらかといえば、サトクリフでは白い手のイズーの嫉妬が強調されている。病床のトリスタンは生気を失っていき、戻って来る船の帆は白か、それとも黒か、この一つの思い

が彼の中を狂おしく駆けめぐっている傍らで、白き手のイズーは彼の首にかけてあった指輪がなくなっていることに気づくとともに、そのうめき声からトリスタンがもう一人のイズーを呼びに使いをやり、その合図が帆の白黒であることを知ってしまい、嫉妬が彼女を引き裂いたのである。白い手のイズーは船を待つことだけがトリスタンの生命を生きながらえさせているのだと知った。ある朝、最初の朝日が部屋に差し込んできたとき、白い手のイズーが海に面した窓辺に近寄ると、コーンウォールの方角から船が近づいて来るのが見えた。その帆は純白であった。喜びと悲しみがともに彼女の中にあふれた。トリスタンを救えるただ一人の人間がやって来たという喜びと、その者が常に自分よりも深く愛されていた女であるという悲しみ。この喜びと悲しみが彼女の身内でせめぎあって、心は乱れに乱れた。寝台からかすかにトリスタンの声が聞こえ、船の近づくのを聞き知って、トリスタンが帆の色を尋ねたとき、彼女の身内に狂おしい嫉妬があふれ、その一瞬、彼女は彼に対する怒りで胸がいっぱいになって、彼女は「帆は黒です」と答えた。トリスタンの目から光が失せるのが分かった。白い手のイズーは走り寄って、その上に身をかがめると、かすかに「イズー、イズー、なぜ来てくれなかった？」とつぶやくのが聞こえた。彼女は彼が呼んでいるのが自分ではないことは分かった。彼女が両腕をまわして彼を抱き締めると、彼の身体を激しい痙攣（けいれん）が走り、彼女は名前を呼んでしがみついたが、彼が息絶えたのが分かった。このように最終場面では白い手のイズーの嫉妬が表面に出て、彼女の内面が語られていることが分かる。

しかし、そのあとの最後の場面ではもちろん主役の座を握るのは王妃イズーである。その王妃イズーの船が港に入ることができたのは、夕方近くになってからであった。王妃イズーが最初に耳にしたのは、街から教会の鐘が鳴り響く音であり、最初に出会った男からトリスタンが死んだことを聞き知った。彼女は教会へ急ぎ、棺台のそばに来て、トリスタンの遺体をはさんで、もう一人のイズーと向かい合った。彼女は「奥方、どうぞそこを退（ど）いてください。私こそそこの人のお側に立つべき者です。あなたよりも私の方が彼を愛していました」と、ベルール系とほぼ同じ内容の言葉を口にしてから、彼に腕をまわし、その口に甘い口づけをしたが、その口づけとともに彼女の心は張り裂けて、魂は去って、彼の魂と一つになったのである。白い手のイズーはただ一瞬嫉妬に目の眩んだことを深く悲しみ、二人の王家の墓に葬ることにした。しかし、その後、マルク王がやって来て、二人の遺体はコーンウォールに持ち帰って、一つの墓に並べて葬られた。そしてトリスタンの心臓からはハシバミの木が、イズーの心臓からはスイカズラが生え出て、それらは身を曲げて互いに絡み合い、一つになった。そうしてこののち二人が長く引き裂かれることはなかった。以上のように、サトクリフはベルール系に従

いながらも、若干の変更を加えることによって独自のトリスタン物語を展開させていることが容易に理解できよう。

結び

以上、述べてきたように、九世紀のケルト伝説を素材として十二世紀にウェールズの地で成立したトリスタン伝説は、語り継がれていくうちに大きくベルール系とトマ系に分かれていったのであるが、二十世紀の作家ローズマリー・サトクリフは、その二つのうちどちらかと言えば、ベルール系に従って自らのトリスタン伝説を展開していると言える。もちろんサトクリフは、成立して以来複雑に物語の中に織り込まれているさまざまなエピソードを大幅に削除して、自らの物語をスピーディに展開させる努力をしていると同時に、逆に若干の新たな要素をも織り込むことによって独自の物語世界を作り上げている。

その中でも最も際立った特徴は、トリスタン伝説が成立して以来伝統的に織り込まれてきた「媚薬」をサトクリフは削除していることである。この愛の薬のモチーフを削除した理由を、サトクリフは自らの作品の「前書き」において明らかにしている。それによると、「中世の物語作者は、イズーが人妻であるにもかかわらず、トリスタンと愛し合うことへの言い訳として、愛の薬をつけ加えた」とサトクリフは解釈し、そうだとすると、「わたしには、彼らの中に存在していた真実でなまなましいもの、彼らの一部であるものを、魔法薬の一種を飲んだ結果という、人工的なものに変えてしまうような気がする」(11 頁) ので、その神秘的な愛の薬のモチーフを削除したと言うのである。言い換えれば、サトクリフが描こうとしているトリスタンとイズーの愛は、「人工的な」ものではなく、恋人たちの心のうちから自然に生まれ出てくる「真実でなまなましい」ものである。このコンセプトに従ってサトクリフは、なるだけ「不自然なもの」を削除しながら、トリスタンとイズーの関係に修正を施していると言える。

サトクリフの作品でまず最初にトリスタンとイズーが顔を合わせるのは、トマ系のように一回目のアイルランドへの旅においてではなく、ベルール系のように二度目のアイルランドへの旅で竜を退治したのち、王女イズーに助けられて介抱を受けたときである。サトクリフはこの場面でも伝統的な不自然な「ほほ笑み」のモチーフを削除して、その代わりに独自の絹の小袋を取り入れて、新たな展開にしている。ここで王女イズーはトリスタンが伯父モロルトの殺害者であることを悟り、最初はトリスタンを殺そうとするものの、侍女ブランジャンの説得により彼を許すことにした。この時点でイズーの心の

中にはトリスタンへの愛が、わずかながらではあれ、芽生えかけていたと推測される。なぜなら、そのあと竜の舌のエピソードで王の家令の悪事があばかれて、トリスタンが王女イズーを自分の花嫁としてではなく、マルク王の花嫁として要求したとき、彼女は「あらぬかたを見ていた」のみならず、その日、イズーは王家の広間にあって、「トリスタンの方を見もせず、一言も言わぬままであった」と締め括られているからである。この彼女の沈黙は、当然そうなるものと期待していたトリスタンとの結婚が実現しないどころか、よりによってトリスタン自らが王女イズーの嫁ぎ先としてマルク王を挙げたことに対する怒り、トリスタンに対する失恋を意味していると解してもよいであろう。

そのことをはっきりと裏付けるのが、マルク王のもとへ向かう途中、ウェールズの海岸の入り江で休息することになったときである。船の中で媚薬を飲むという伝統的なモチーフを削除したサトクリフは、この場面で彼女独自のあらすじを展開させている。すなわち、王女イズーが船縁を越えて上陸しようとした際、トリスタンは彼女を両腕で抱えて、そのまま浅瀬を渡り、白砂の上に下ろしてあげたが、このとき初めて二人は互いに身体に触れ合ったのである。この場面で作者も述べているように、もちろん王女がトリスタンの傷を手当てしてやったことはあるが、それはまったくの別物であった。今初めてトリスタンが真の意味で王女の身体に触れて彼女を白砂の上に下ろしてあげたとき、二人はにわかに離れがたいかのように手を握り合い、この瞬間、二人の中には何かが芽生えてきたのである。それが愛だとはっきり分かるのは、翌日の夜、トリスタンが明日の船出を知らせるためにイズーの小屋を訪ねたときである。すでに述べたように、この場面でまずは王女イズーの方から愛の告白をするが、これはケルト伝説の「駈落ち譚」に合わせたものであろう。イズーの愛の告白にトリスタンは心臓が二つに引き裂かれるのを感じたが、そのあと彼も自らの本心を打ち明けて、二人はここで初めてかたちのある愛によって結ばれるのである。

それ以降、マルク王の宮廷でトリスタンとイズーが逢瀬を重ね、密告者たちの策略に陥り、ついには処刑されそうになっても、二人がなんとかそれらの困難を切り抜けるあらすじの展開は、大筋においてはベルール系と同じであるが、サトクリフは不必要なエピソードをなるだけ削除して、物語の展開をスピーディにするとともに、現代の読者に理解できるような表現にする努力をしている。

その後、恋人たちが谷間に逃げ込んで、そこに小屋を建てて一緒に暮らし始めてから三年が経った場面でも、サトクリフの特徴が明らかに認められる。サトクリフでは媚薬のモチーフが最初から削除されているので、当然のことながら薬の期限が切れるエピソードは織り込まれていない。その代わりに取り入れられているのは、トリスタンとイズ

ーが二人きりで小川を眺めていたとき、イズーはふいに恐れを感じたように、「私たちの上にかげが落ちてきた」と口にすることである。二人の愛がわずかに芽生える場面もぼやけた表現であったように、この場面での二人の愛の生活の終焉に関しても表現がぼやけている。ともかくこのとき、作者も述べているように、「イズーの心には何かの変化が現れ始めていた」のであり、その心境に決定的な変化をもたらすのは、マルク王が狩りのためその近くにやって来たことである。二人はその日の夕方、何かの物音に気づき、はぐれた犬か、あるいは狼かと思って、耳を澄ませたが、声は二度と聞こえなかった。しかし、トリスタンはその夜、寝台に二人で横になったときには、狼が近づいている場合によくするように、抜き身の剣を自分の傍らに横たえておいたのである。この抜き身の剣を二人の間に置くエピソードは、何の説明もなく用いられたり、ただ単に「ケルトの習慣に従って」という説明を付け加えられているだけであるが、サトクリフは「狼が近くいるから」だという、現代の読者に分かりやすい説明を施している。

このような読者の納得のいく理由を付け加えていることは、そのあとマルク王が抜き身の剣を挟んで寝ている二人の恋人を目にして、剣と手袋を置いて帰って行く場面にもあてはまる。すなわち、寝ている二人を目の前にして、マルク王は二人に剣を振るえばよいだけであったが、相手の無力さのゆえにそれもできなかった。しばらく見つめているうちに、マルク王はますます美しく映るイズーにはよりいっそう「恋しさ」が募るのを覚え、またトリスタンには「甥としての昔の愛情」がなつかしく思われて、トリスタンの剣を取り上げ、その代わりに自分の剣を置き、イズーの胸の上には狩猟用の手袋の片手を置いてから、その場を立ち去って行くのである。従来の伝承ではこの剣と手袋の意味については何の説明もされておらず、ただ単にケルト伝説からのヴァリエーションだと考えられてきたふしがあるが、サトクリフはこの剣と手袋の意味を恋人たちの会話の中ではっきりと理解しやすいものにしている。つまり、ここでサトクリフは花嫁イズーが初めてマルク王に出迎えられたとき、彼女の手がたいへん冷たかったことをこの場面に関連づけて、片方の手袋には「イズーの冷たい手をマルク王の手で暖めてやれよう」という意味を込めたのである。そして剣には「マルク王の足元に身を投げ出すように」という意味あいを盛り込んで、その場に残して行ったのである。この手袋と剣を置いて去ったマルク王の意図を読み取った二人は、そろそろ元の鞘に収まる時期でもあったので、マルク王のもとに帰って行った。しかし、王妃イズーはマルク王のもとに戻ったものの、トリスタンはその宮廷から立ち去ることを命じられて、放浪の旅に出かけて行くのである。

その放浪のあと、トリスタンは白い手のイズーを娶ることになるが、従来の特にベル

ール系ではそれまでの経過が一つ一つ細かに展開されていたのに対して、サトクリフはここでも余計なエピソードは極力削除して、すぐさま白い手のイズーの国に辿り着くことになっている。その国でトリスタンが白い手のイズーを娶ることになるのも、ベルール系ではそこの国王の息子カイニスがトリストラントをいつまでも傍らに引き止めておくために妹イザルデとの結婚を勧め、またトマ系では二人のイズーの存在に悩んだのちの結婚であったのに対して、サトクリフではそこの国王自らが嫁として差し出すイズーの心のうちに自らに対する愛情を読み取って、彼女を娶ることにしている。トマ系に見られるようなトリスタンの苦悩の表現はなるだけ削除され、淡々とスピーディに物語が展開されており、そこにサトクリフの特徴があると言えよう。

こうしてトリスタンは白い手のイズーを娶ったのであるが、ともに丸一年暮らしても妻の身体に触れないままであったのは、従来のベルール系と同じである。ただベルール系では、このあと彼女の兄カイニスがそのことを知るきっかけとして、ケルト伝説に由来する「大胆な水飛沫」のモチーフを用いているのに対して、サトクリフはその伝説的で、どちらかと言えば、非現実的なエピソードを削除して、その代わりに兄カエルダンは妹イズーを深く愛していたので、妹夫婦の間がどのような状態であるかを悟っており、ちょうどよい機会をとらえて、トリスタンにその理由を問い質（ただ）すことにしている。現代の読者にはよく理解できる展開であり、このときのトリスタンの打ち明け話によって、あらすじはコーンウォールの王妃イズーを訪問するエピソードとともに、カエルダンの恋人ガージョレインを訪問するエピソードへと発展していくのである。ここでもサトクリフはベルール系の全部で五度にも及ぶ王妃イズー訪問のエピソードを簡略化して、すぐさまトリスタンが致命傷を負うカエルダンの恋人訪問のエピソードへと移り、物語の展開をスピーディに進めていると言える。

トリスタンはこうしてカエルダンとともにその恋人ガージョレインを訪問したあと、その夫ナムペニスに追跡され、その戦いで致命傷を負うこととなり、物語は最後の「黒い帆」のエピソードへと移っていくが、ここではサトクリフは特に白い手のイズーの嫉妬を強調している。彼女はトリスタンの首にかけてあった指輪がないことに気づくとともに、彼のうめき声から、彼がもう一人のイズーへ使者を送り、その合図が船の帆の白黒であることを知ってしまう。やがて白い帆を掲げて船がこちらに向かっていることを知ったときには、白い手のイズーは、トリスタンを救い出すことのできる唯一の女性が近づいているという喜びを感じると同時に、その女性が自分よりも深く愛されていた者であるという悲しみとに打ちのめされ、ついには嫉妬からトリスタンに「黒い帆」と嘘をついてしまうのである。この一言がトリスタンの命のみならず、そこへ駆けつけた王

妃イズーの命をも奪い取る結果となったのであり、そのことを白い手のイズーは深く悲しみ、二人を王家の墓に葬ることにした。しかし、その後、マルク王もまたそこへ駆けつけ、二人の遺体はコーンウォールに持ち帰って、一つの墓に並べて葬られた。サトクリフはその最終場面を基本的にはベルール系に従いながらも、彼女独自の表現で、「トリスタンの心臓からはハシバミの木が、イズーの心臓からはスイカズラが生え出て、それらは身をまげて互いに絡み合い、一つになった」と語ったあと、「そうしてこののち永く二人が長く引き裂かれることはなかった」と結んでいる。この最後の表現は、媚薬による神秘的な愛ではなく、二人の間に自然に生まれ出てきた真実の愛をほめ称えるにふさわしいものである。サトクリフはところどころでケルト伝説の雰囲気を織り込む工夫を凝らしながらも、全体的には人工的ではない、真実の愛を展開させようと努めているのであり、神秘的な秘薬を用いずに、合理的に物語を展開させることによって、現代の読者に読みやすく、かつ理解しやすくする努力をしていることが容易に窺い知れよう。そのような超自然的な媚薬や非現実的なエピソードを削除するとともに、一方では現代の読者に理解しやすい新しいエピソードを織り込むことによって、サトクリフはケルト伝説と中世のトリスタン伝説をまさに二十世紀の新しい現代作品に昇華させることができたのである。　（２００８・３・２４）

（※ 本稿は平成１８年度および１９年度の「欧米言語ゼミナール」で行った教育研究の成果の一部である。まず最初に４年次生の山本理奈が指導教授石川の指導のもとに卒業論文を書き上げ、それにさらに石川が大幅に加筆修正を施したもので、卒業論文の約１．５倍にあたる共同研究の成果であることを付記しておく。）

参考文献

1．作品

Rosemary SUTCLIFF: Tristan & Iseult, Farrar, Straus and Giroux 1991
ローズマリー・サトクリフ（井辻朱美訳）『トリスタンとイズー』　沖積社　1989 年
ローズマリー・サトクリフ（山本史郎訳）『アーサー王と円卓の騎士』　原書房 2001
ベルール（新倉俊一訳）『トリスタン物語』（「フランス中世文学集１　信仰と愛と」所収）白水社　1990 年

トマ（新倉俊一訳）『トリスタン物語』（「フランス中世文学集１　信仰と愛と」所収）白水社　1990年
ゴットフリート・フォン・シュトラースブルク（石川敬三訳）『トリスタンとイゾルデ』郁文堂　1976年
小竹澄栄訳『トリストラントとイザルデ』（ドイツ民衆本の世界VI）国書刊行会 1988年
古賀允洋訳『サア・トリストレム』ガーデン会「飛行」第33～40号 2000～2007年
サー・トマス・マロリー（中島邦男・小川睦子・遠藤幸子訳）『完訳アーサー王物語』（上）（下）青山社 1995年
トマス・マロリー（井村君江訳）『アーサー王物語』（Ⅰ～Ⅴ）筑摩書房 2004～2007年
リヒャルト・ワーグナー（高辻知義訳）『トリスタンとイゾルデ』音楽之友社 2000年
ベディエ編（佐藤輝夫訳）『トリスタン・イズー物語』岩波書店（岩波文庫）1953年
ブルフィンチ（野上弥生子訳）『中世騎士物語』岩波書店（岩波文庫）1942年
ゲルハルト・アイク（鈴木武樹訳）『中世騎士物語』白水社 1996年

2. 研究書

ミシェル・ガズナーブ（中山真彦訳）『愛の原型―トリスタン伝説』新潮社 1972年
佐藤輝夫『トリスタン伝説―流布本系の研究』　中央公論社 1981年
井村君江『アーサー王物語―イギリスの英雄と円卓の騎士団』筑摩書房 1987年
加藤恭子『アーサー王伝説紀行―神秘の城を求めて』中央公論社（中公新書）1992年
Danielle Buschinger / Wolfgang Spiework (Hrsg.): Tristan und Isolde im europäischen Mittelalter. Philipp reclam jun. Stuttgart 1991.

3. その他

世界文学大事典２　集英社 1997年
オックスフォード世界児童文学百科　原書房 1999年